ISSN 0919-2417

エジプト学研究 第 25 号

The Journal of Egyptian Studies Vol.25

2019

日本エジプト学会
The Japan Egyptological Society

ISSN 2187-0772

エジプト学研究第 25 号　2019 年

The Journal of Egyptian Studies Vol.25, 2019

目次

The Journal of Egyptian Studies Vol.25, 2019

CONTENTS

Field Reports

調査報告

エジプト　ダハシュール北遺跡調査報告
－第 25 次発掘調査－

吉村　作治＊1・矢澤　健＊2・近藤　二郎＊3・柏木　裕之＊4
山崎　世理愛＊5・石崎　野々花＊5・有村　元春＊6

Preliminary Report on the Excavations at Dahshur North: Twenty-Fifth season

Sakuji YOSHIMURA*[1], Ken YAZAWA*[2], Jiro KONDO*[3], Hiroyuki KASHIWAGI*[4]
Seria YAMAZAKI*[5], Nonoka ISHIZAKI*[5], Motoharu ARIMURA*[6]

Abstract

The joint expedition of Higashi Nippon International University and Waseda University, under the direction of Prof. Dr. Sakuji Yoshimura and Ken Yazawa as the field chief, carried out an excavation at the cemetery of Dahshur North on February 2018. In this season, the area located at the northernmost part of the cemetery was investigated (Fig.1). The area measures 10 m (north-south) by 20 m (east-west), and eight shaft tombs were identified. Five of them (Shaft 150-153, 155) were cleared, which are dated to the late Middle Kingdom mostly by accompanying pottery vessels, except Shaft 150 which appeared to be made in the early New Kingdom. The most remarkable discovery was Shaft 151 which has three subterranean chambers, two to the south (the uppermost and lowermost chambers) and one to the north (mid-level chamber). Although it was already plundered, a considerable amount of pot-sherds and painted plaster fragments as well as an eye inlay once adorned with a mummy mask or an anthropoid coffin, were retrieved. In addition to a discovery of a painted ear fragment made of plaster, some of plaster fragments have depictions of an eye and a part of collar decoration, and fragments with cursive hieroglyphs were also found at the lowermost chamber, all of which appeared to comprise of mummy mask(s). Pottery vessels found at the lowermost chamber appear to be earlier than vessels derived from the uppermost chamber, which leads to the assumption that the lowermost chamber was made at first, and then the middle and uppermost chambers were made successively. While shaft tombs with multiple chambers were often attested in the Middle Kingdom cemetery, a case that the sequence of making and using chambers can be archaeologically determined is quite rare, which makes our result noteworthy.

1. はじめに

ダハシュール北遺跡は、衛星リモートセンシングを活用した調査によって 1995 年に発見された墓地遺跡

＊1　東日本国際大学学長・教授
＊2　東日本国際大学エジプト考古学研究所客員准教授
＊3　早稲田大学文学学術院教授
＊4　東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
＊5　日本学術振興会特別研究員（DC）
＊6　早稲田大学大学院文学研究科修士課程

＊1 *President, Professor, Higashinippon International University*
＊2 *Visiting Associate Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*
＊3 *Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*
＊4 *Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*
＊5 *Reserch Fellow (DC), Japan Society for the Promotion of Science*
＊6 *MA Student, Department of Archaeology, Waseda University*

である（図1）。新王国時代の人物「イパイ」、「パシェドゥ」のトゥーム・チャペルが発見され、周囲からは同時代のシャフト墓、土壙墓が多数出土した。2004年からは遺跡の西側に位置し、同じく新王国時代に造営された「タ」のトゥーム・チャペルとその周辺を重点的に調査し、2005年にはこのトゥーム・チャペルの下から中王国時代の人物「セヌウ」の墓が埋葬時の状態で見つかった。当該地区からは類似した中王国時代のシャフト墓が多数発見され、この遺跡が中王国・新王国の両時代で活発に利用された墓地であることが分かってきた。2015年には「イパイ」と「タ」の間の地区で発掘調査が実施され、中王国時代の墓とともに、日乾レンガによる壁体を持ち、「パシェドゥ」墓と類似した地下室を持つ新王国時代の墓（シャフト125）が発見された[1)]。

これまでに発見された「イパイ」、「パシェドゥ」、「タ」墓やシャフト125など地上構造物を備えた大型の遺構は、いずれも自然地形の高所に位置し、遺構の選地と地形との関係が注目された。そこで、前回調査では「イパイ」墓北東の高所に調査区を設定し発掘を実施した。その結果、これまでに確認されていた中王国時代、新王国時代の埋葬の中でも比較的古い時期の遺構が発見され、両時代初期の様相や墓地の形成過程を検討するための有益な資料が得られた（Yoshimura et al. 2018b; 吉村他 2018）。今期調査ではダハシュール北遺跡の北端中央部にある高所に調査区を設定し（図1）、発掘調査を実施した[2)]。以下にその成果を報告する。

2. 地上部の発掘調査

ダハシュール北遺跡グリッド3E北端付近、南北10m、東西20mの範囲に調査区が設定され、地上部の発掘が実施された。対応するグリッドは3E97c-d、98c-d、3F07a-b, 08a-bである（図1）。表層の砂礫を除去したところ、8基のシャフト墓（シャフト150～157）が発見された。今期調査ではこの内5基の発掘を実施した。

3. シャフト墓の発掘調査

(1) シャフト150

①遺構の概要（図2）

シャフト150はグリッド3F07aに位置しており、シャフト部の平面は南北0.9m、東西1.9mであった。長軸の方向は地軸の東西にほぼ一致している。シャフト部の深さは3.9mであり、床面は隣接するシャフト151の地下室（B室）の天井と接触し、大部分が失われていた。シャフト部の底部から東西に部屋が掘削され、東側のA室は南北2.2m、東西2.5mの矩形をし、天井高は1.1mであった。西側のB室は南北2.0m、東西2.7mの矩形平面で、天井高は1.0mである。A室、B室ともに天井の岩盤は脆く、大部分が崩落していた。また、どちらの部屋も開口部の幅はシャフトの幅よりやや狭く作られていた。

シャフト部は風成と考えられる砂で満たされていた。A室、B室ともにシャフト部から流れ込んだ砂が厚く堆積し、その上を天井から崩落した岩盤のタフラ塊が覆っていた。A室、B室からは土器片、紐の断片、炭化物、木片などがわずかに出土したが、どちらも埋葬の明確な痕跡は無く、人骨も見られなかった。新王国時代第18王朝中期以前に年代づけられる土器が含まれていたことから、シャフト150は本遺跡における新王国時代の遺構でも最古級に位置付けられる可能性があるが、土器は外から流れ込んだ可能性も捨てきれない。少なくとも周囲に同時代の遺構が位置していた蓋然性は高く、注目される結果と言える。

②出土遺物

図3にシャフト150から出土した土器を掲載した。図3.1と図3.2は胎土がNile B2[3)]で、断面が台形を呈し底部の中心に穿孔を有し、「フラワーポット（Flowerpot）」としばしば呼称される（Holthoer 1977: 83-84;

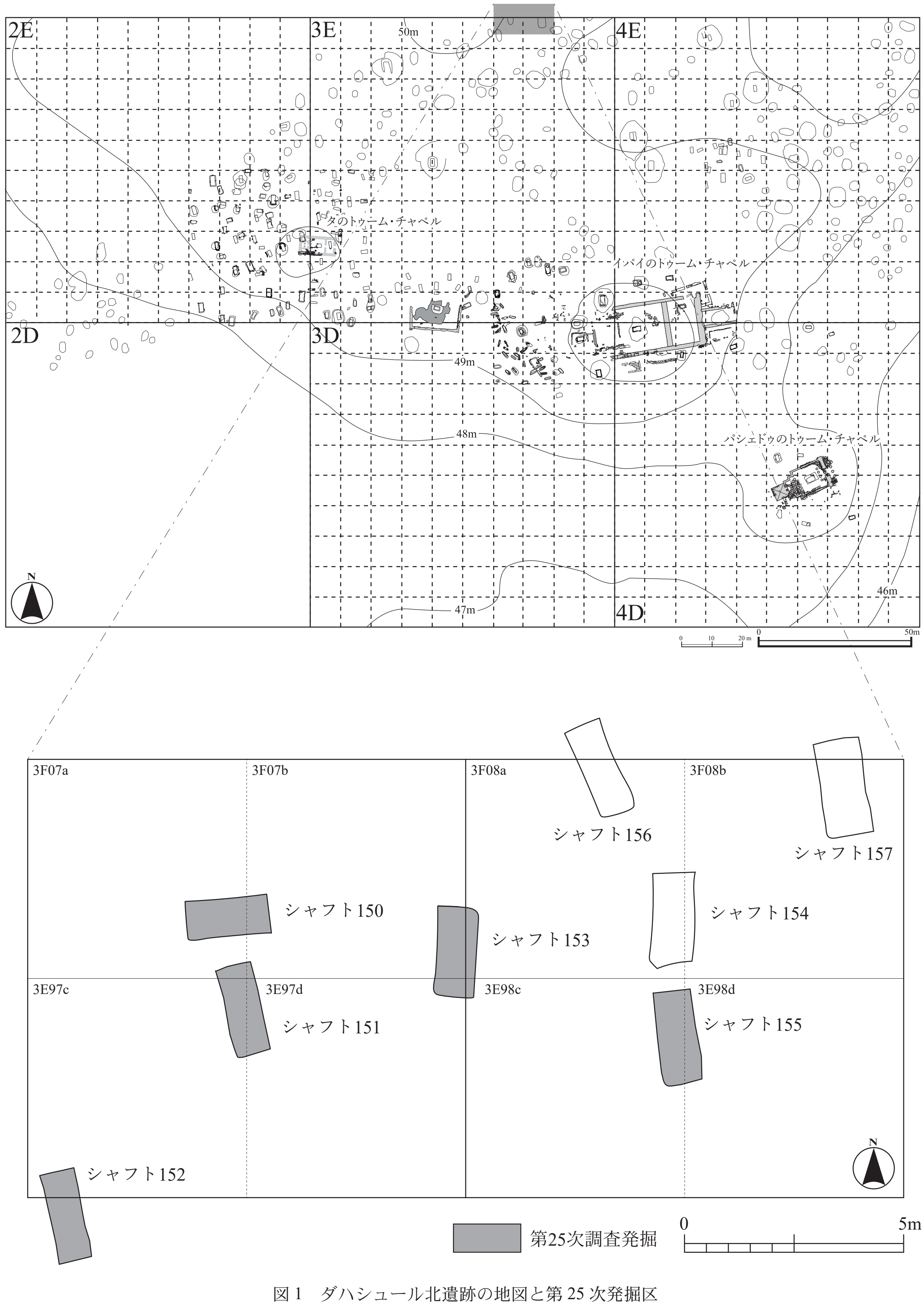


図 1　ダハシュール北遺跡の地図と第 25 次発掘区
Fig.1 Map of Dahshur North and the excavated area in 25th season.

Rose 2016: 214)。図 3.1 は A 室とシャフト部から出土した断片で構成され、図 3.2 は主に B 室出土の断片から復元された。この器形は第 18 王朝のハトシェプストの治世で一般的に見られるようになり、アメンヘテプ 3 世の治世では見られなくなると言われている（Williams 1992: 34-35)。近傍のコム・ラビア遺跡では、第 18 王朝初期からハトシェプストまたはトトメス 3 世治世に年代付けられた層から同種の器形が発見されている（Bourriau 2010: 5, 81, Fig.24.4.10.4-9)。図 3.3 は Nile B2 の長頸壺で、頸部と胴部に黒色の帯状の彩色が認められた。黒色の帯を施すのは第 2 中間期後半から第 18 王朝中期までにかけて見られる装飾とされている（Hope 1989: 7)。

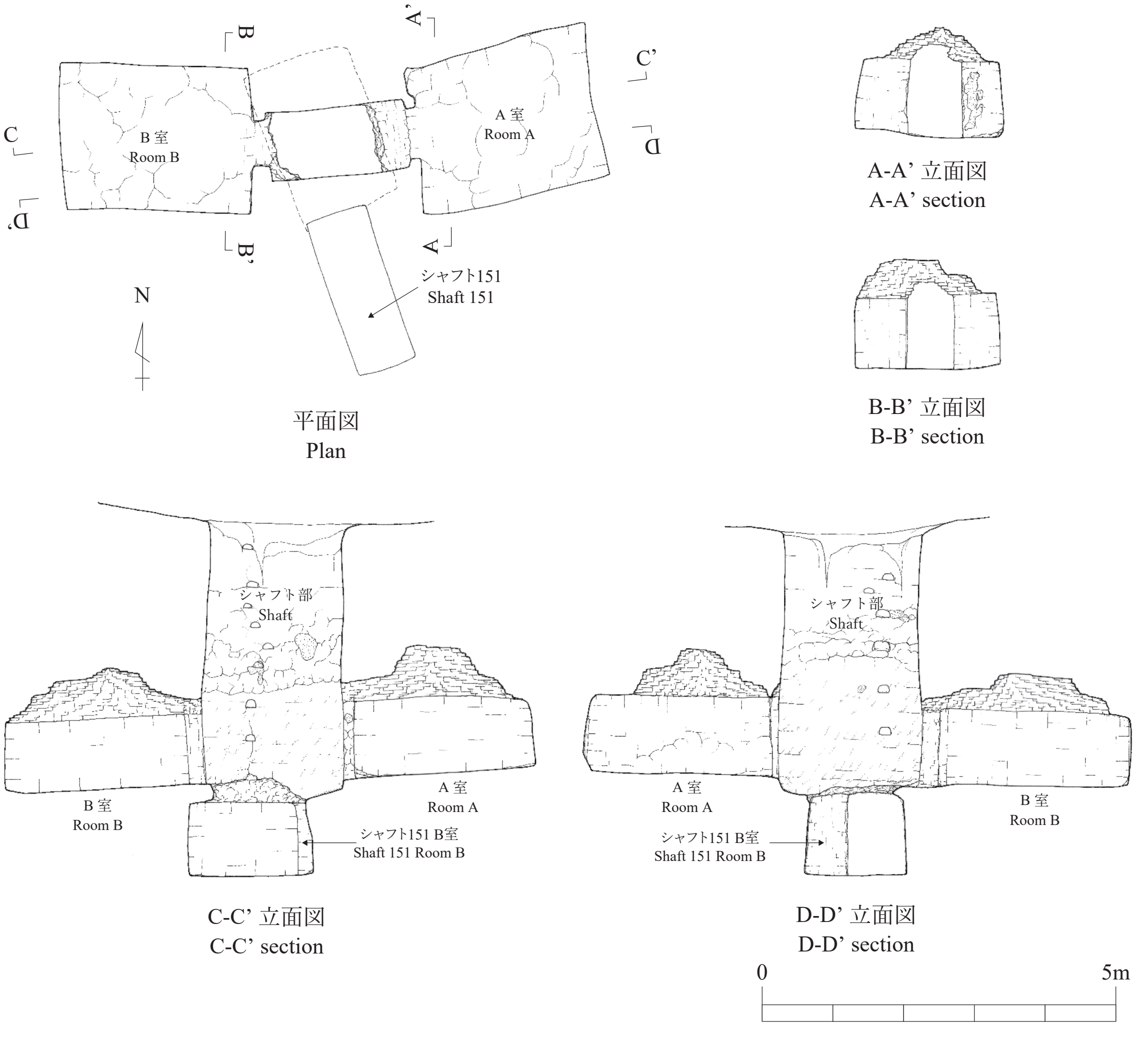


図 2　シャフト 150 平面・立面図
Fig.2 Plan and sections of Shaft 150

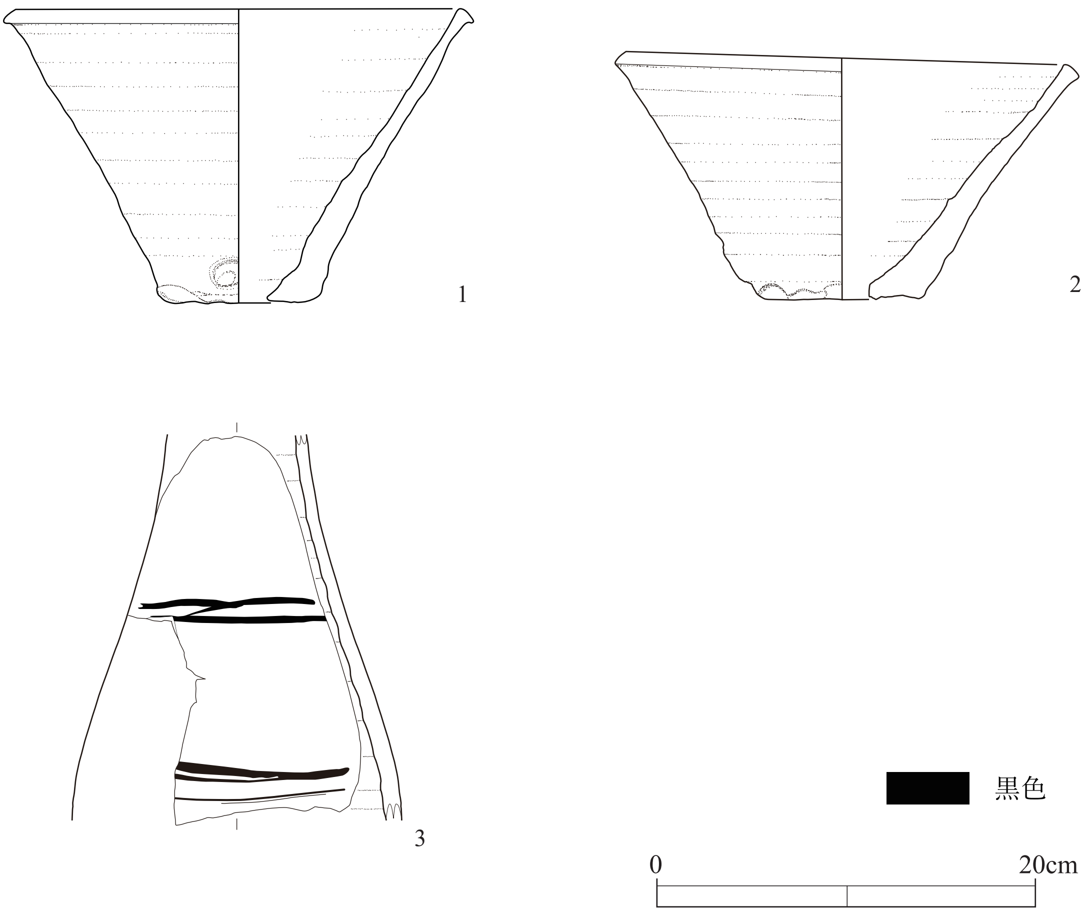


図 3　シャフト 150 出土土器
Fig.3 Pottery vessels from Shaft 150

(2) シャフト 151

①遺構の概要（図 4）

シャフト 151 はグリッド 3E97 の c から d にまたがり、シャフト部の平面は南北 2.1m、東西 0.8m であった。長軸は概ね南北方向だが、やや反時計回りに傾いている。シャフト部の深さは 6.1m で、北側に 1 つ、南側に 2 つの部屋がそれぞれ異なる深さで掘られ、全体で 3 層の構造になっている。第 1 層（最上部）の A 室は南側に設けられ、南北 1.9m、東西 0.9m の長方形平面で、僅かに屈曲している。天井高は 1.1m であった。第 2 層は北側に部屋（B 室）が掘削されていた。B 室の平面は南北が 2.3m、東西 1.6m、天井高は 1.1m であり、東側に部屋が拡張されていた。また、上述のようにシャフト 150 のシャフト部と B 室が接しており、B 室の天井は大部分が失われていた。第 3 層は南側に部屋（C 室）があり、C 室平面は南北が 2.1m、東西が 0.8m の長方形で、天井高が 1.1m であった。

シャフト 151 内部の堆積の断面図を図 5 に示した [4)]。シャフトの上部は風成の細砂が堆積しており（図 5-1、4）、A 室にも同じ細砂が流れ込んでいた（図 5-2）。A 室の奥にはタフラの堆積（図 5-3）が認められた。A 室からはミイラマスクの一部と考えられる彩色プラスター片、ミニチュアの皿形土器を含む土器片、炭化物、布、木片、人骨が出土した。シャフト部の A 室床面レベルより下の層（図 5-4、5、6）では、A 室から出土した土器片と接合する土器が複数あり、本来 A 室に置かれていたものが、シャフト部に落下したと考えられる。これらの層からは土器片、彩色プラスター片、炭化物、木片が出土しており、特筆すべきは眼の

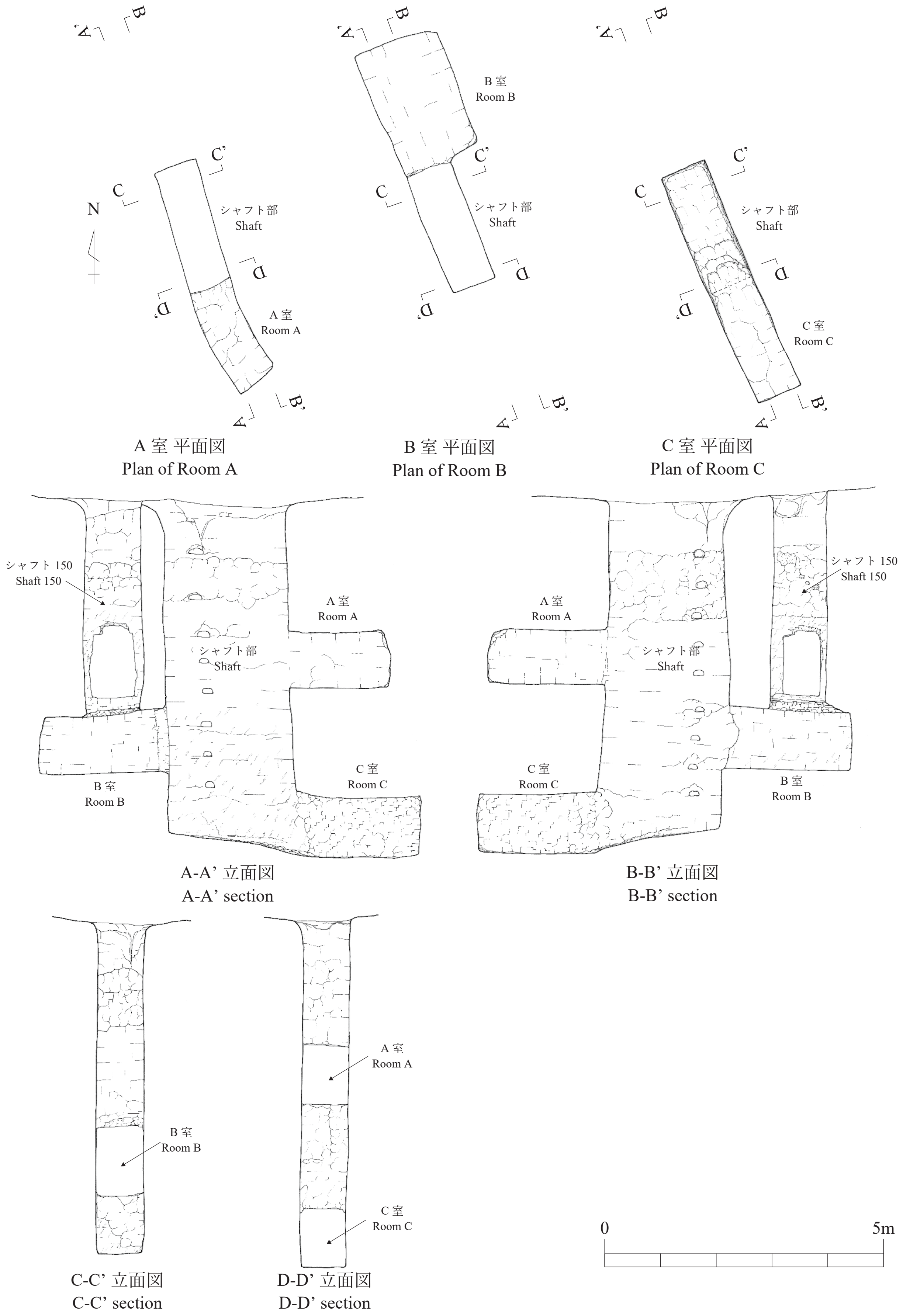


図 4　シャフト 151 平面・立面図
Fig.4 Plans and sections of Shaft 151

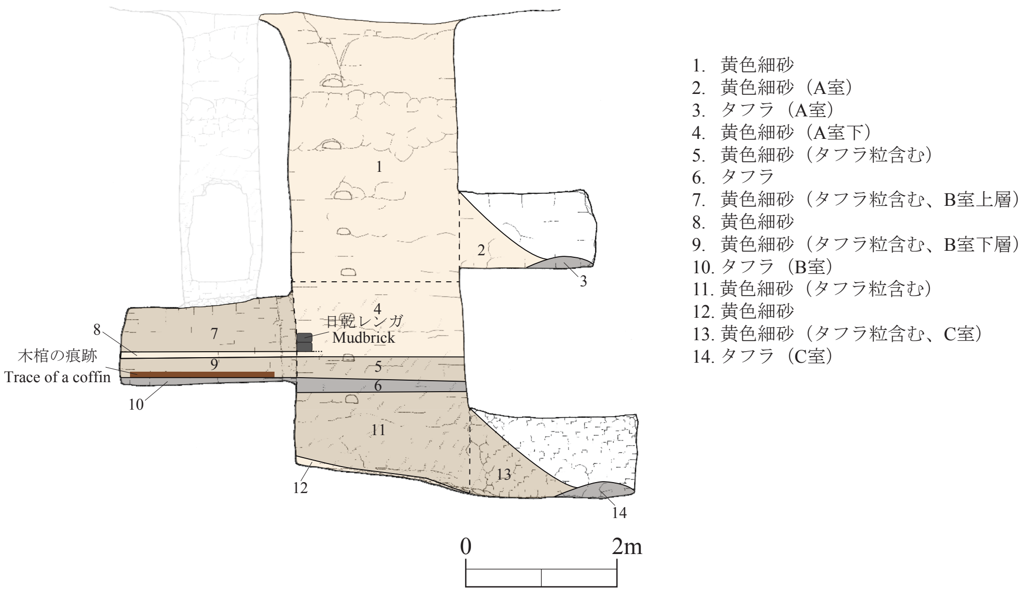


図 5　シャフト 151 堆積図
Fig.5 Stratigraphy of Shaft 151

象嵌で図 5-5 の層（タフラの混じった黄色細砂層）から出土した。象嵌はミイラマスクまたは人型木棺の右眼と推測される。

B 室は隣接するシャフト 150 からの土砂の流入があり、やや複雑な様相を呈する。図 5-7 はタフラ粒が含まれた砂層で、その下に薄い細砂の層（図 5-8）があり、その下にタフラ粒を含む砂層（図 5-9）が堆積していた。B 室の開口部付近では図 5-8 の層の上に日乾レンガが積まれていた。層序や位置から見て日乾レンガは B 室の埋葬の際に部屋の封鎖に使用されたものではなく、シャフト 150 掘削後に侵入した者が土留めのような目的で設置した蓋然性が高い。 B 室の床面上にはタフラの層（図 5-10）があり、これは図 5-6 のタフラ層と連続していたと推測される。この層の上面から箱型木棺の底部が発見された。木棺は劣化が著しく、残存している部分は長辺 180cm、短辺 42cm で、装飾等は不明だった。床面の直上から発見されたわけではないため、埋葬時の原位置ではないと考えられる。B 室からはその他に人骨、土器片、炭化物、プラスター片、木片が出土した。

シャフト部の図 5-6 の下はタフラ粒を含む砂層に変わっており（図 5-11）、その下部では多くの土器が発見された。また、シャフトの最下部では薄い砂層（図 5-12）があり、土器片および貝の破片が出土した。C 室の入口付近のタフラ粒を含む砂の厚い堆積（図 5-13）は図 5-11 の堆積と連続している。C 室奥側にはタフラで構成された層があり（図 5-14）、土器片、彩色プラスター、木片、人骨、炭化物、貝片などが含まれていた。このタフラ層からは白色プラスター製の等身大の耳が発見された。また C 室内には彩色された眼の図像や黒色のヒエログリフが縦に書かれたプラスターの断片が散らばっており、耳とともにミイラマスクを構成していたと推察される。

②出土遺物

a) 眼の象嵌（図 6.1）

シャフト部、南東コーナー付近の図 5-5 の堆積層から出土した。虹彩に当たる黒色部分が白目部の正面に嵌め込まれており、目頭と目尻部分が赤色に塗られていた。その他の面にも赤い顔料が付着していた。黒目

部はガラス質の石材で、おそらく黒曜石、白目部分はエジプシャン・アラバスターと思われる。

b) 白色プラスター製耳（図 6.2）

　等身大の白色プラスター製の耳であり、C 室のタフラ層（図 5-14）から出土した。表側は黒の彩色が一部残存しており、本来は全面が黒色だったと推測される。裏側にはモルタルが付着しており、ミイラマスクへの接着に使用されていたと考えられる。また、裏側には淡青色の顔料が一部付着しており、ミイラマスクの鬘部分は同色に塗られていたと推測される。

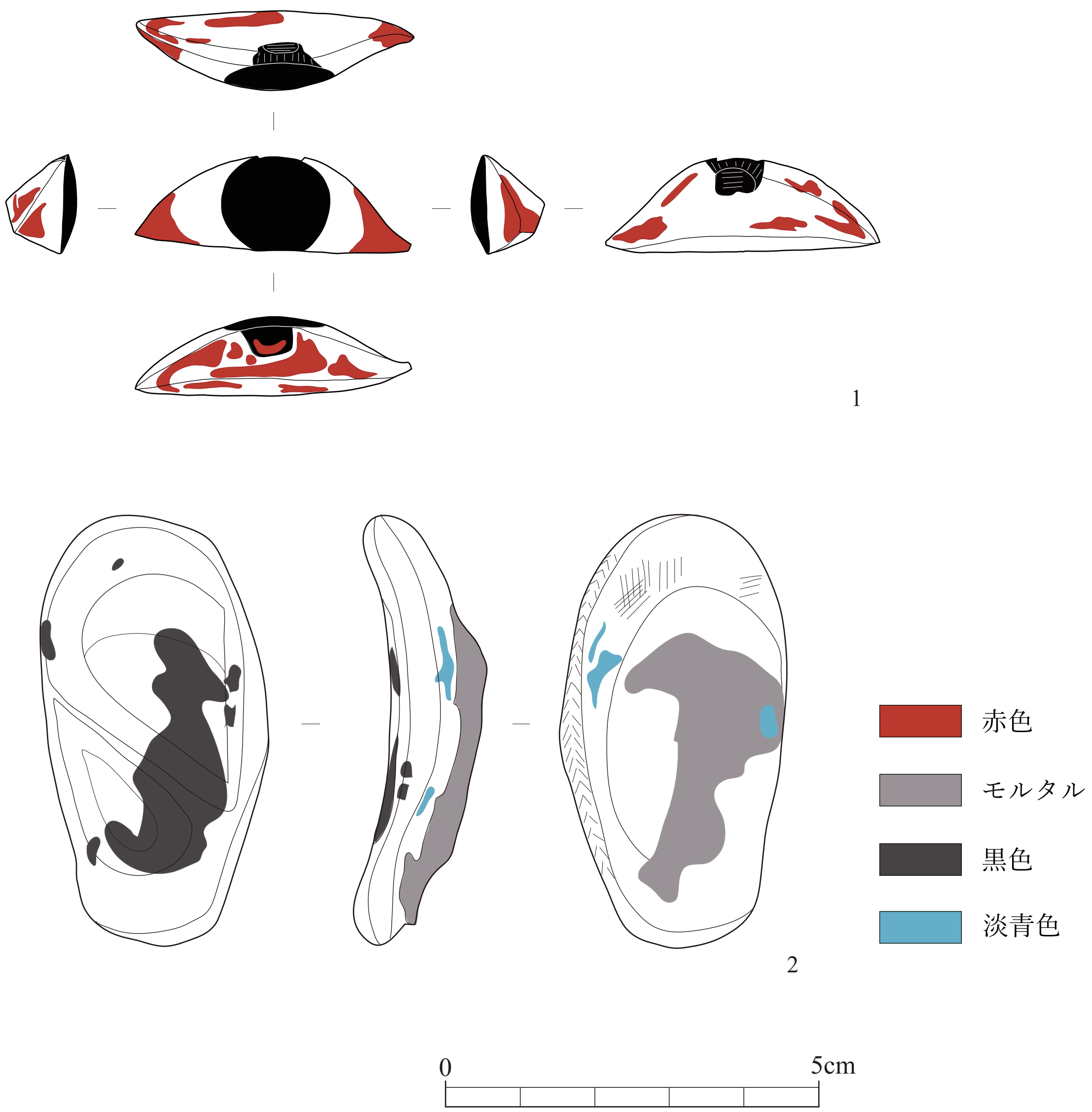


図 6　シャフト 151 出土象嵌、プラスター製耳
Fig.6 An eye inlay and a plaster ear from Shaft 151

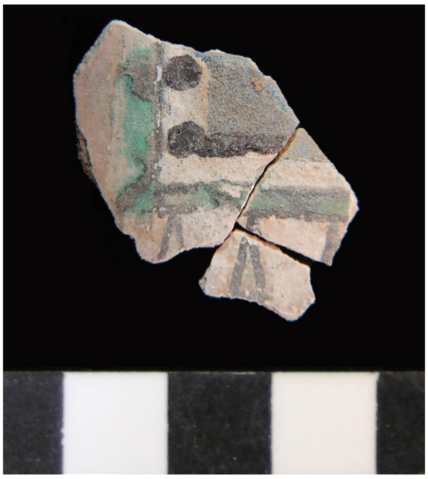
c) 彩色プラスター片（図 7）

A 室のタフラ層（図 5-3）から多数の彩色プラスターが出土している。図 7.1 はその 1 つであり、ミイラマスクあるいは人型木棺の襟飾りに該当する可能性が高い。図 7.2 は C 室のタフラ層（図 5-14）から出土した眼の部分が描かれたプラスター片で、虹彩が褐色で、瞳孔の部分が黒色で表現されていた。図 7.3 は主に C 室のタフラ層から出土した、ヒエログリフの文字が書かれたプラスターの断片群である。縦方向の分割線が引かれ、その間に黒色で文字が書かれていたことが看取される。襟飾りの下部に縦方向の碑文が書かれたミイラマスクはこれまでにも報告された例がある（Lacau 1903-1904: 165-166, pl.XXI）。図 6.2 の白色プラスター製耳や図 7.2、図 7.3 は全て C 室のタフラ層から出土しており、付近には頭蓋骨片も集中していた。したがって、これらは C 室の被葬者に被せられていたミイラマスクの一部であった可能性が高い。

d) 土器（図 8）

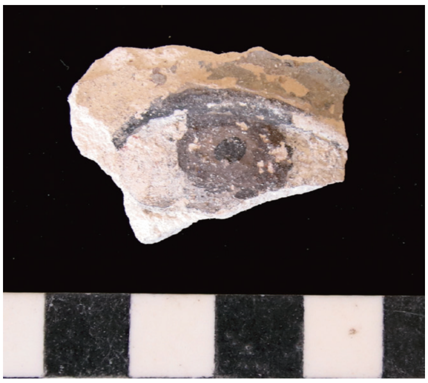
図 8 にシャフト 151 から発見された主な器形を掲載した。

図 8.1 ～ 14 は平底のミニチュア皿形あるいは鉢形で、整形が粗く、底部は糸切りの痕がそのまま残されている。胎土は Nile B2 と C のものがあり [5)]、A 室、B 室、C 室、シャフト部に散在していた。図 8.15 は Nile C の小型碗形で A 室のタフラ層から出土した。



1

3



2

図 7　シャフト 151 出土彩色プラスター片
Fig.7 Painted plaster fragments from Shaft 151

図 8.16 は Nile C の中型の平底鉢形で、胴部が僅かに外反する。内面のみ赤色スリップが塗布され、内面に火を受けた跡が見られた。C 室のタフラ層（図 5-14）とタフラ粒が混じった砂層（図 5-13）から発見された断片で構成されている。同種の器形は第 12 王朝初期からセンウセレト 3 世の治世に年代づけられており（Schiestl and Seiler 2012: 204-206）、これまでに本遺跡で発見された中王国時代の土器の中でも古い様相を示す。図 8.17 はシャフト部の C 室開口部前で発見された Nile C の高台付きの鉢で、胴部に内側方向への屈曲を有する。図 8.18 は B 室で発見された Nile C の鉢で、同じく胴部に内側への屈曲を有する。図 8.16 〜 8.18 は全て内面に黒斑があり、焚香に使用された可能性がある。

図 8.19 〜 8.24 は全て小型の半球形の碗であり、胎土はどれも Nile B1 である。図 8.19 は A 室のタフラ層（図 5-3）と A 室床面レベルより下のシャフト部（図 5-4、5、6）から発見された断片で構成されている。図 8.20、8.21、8.22 も A 室床面レベルより下のシャフト部（図 5-4、5、6）から発見された断片である。図 8.23 は B 室上層（図 5-7）およびシャフト部のタフラ層（図 5-6）の断片から成り、図 8.24 はシャフト部タフラ層（図 5-6）、C 室開口部前（図 5-11）、C 室タフラ層（図 5-14）から出土した断片が接合されたものである。
図 8.25 は Nile B2 の小型ビーカー形で、A 室タフラ層（図 5-3）と A 室床面レベルより下のシャフト部（図 5-5、6）からの断片で構成される。図 8.26、8.27 の Nile C の円錐形の土器はおそらく輪積み成形で、内面、外面ともに縦方向に指で調整した跡が残されている。図 8.26 は A 室入り口付近の砂層（図 5-2）とシャフト部 C 室前（図 5-11）、図 8.27 はシャフト最下部の砂層（図 5-12）と C 室タフラ層（図 5-14）出土の断片で構成されている。

図 8.28 は Nile B1 で C 室のタフラ層（図 5-14）から出土した。口縁部が外反し、内外の両面に赤色スリップが塗布され、外面は磨研調整が施されていた。また、口縁上部の内外両面に白色の付着物が認められる。特徴から、これはおそらく球状の胴部を持ち、漏斗状の外反する頸部を持つ広口壺の口縁部断片と考えられる（cf. Schiestl and Seiler 2012: 400-403）。

図 8.29、8.30 は胎土 Nile C の大型の壺で、「ビール壺」と呼ばれ、中王国時代の遺跡では頻出する器形である [6)]。図 8.29 はシャフト部の A 室床面以下の堆積（図 5-4、5）から成り、図 8.30 はシャフト部のタフラ層（図 5-6）から発見された。ビール壺の頸部の形状から時期を推定する研究が行われており、R. シストルと A. ザイラーによる分類では Class 3f1 または Class 5 に類似する例が見られ、第 13 王朝前半または第 1 四半期に年代づけられている（Schiestl and Seiler 2012: 665, II.H.3.f.1.1, 2, 3, 673, II.H.5.1, 2）。また、主にテル・アル＝ダバアの資料を用いて口唇部の径を厚みで割った商に 100 を乗じた数値（Aperture Index 2）で時期を推定する研究がある（Szafrański 1998; Bader 2009: 160-177）。本例に当てはめると図 8.29 は 532、図 8.30 は 495 という数値を示し、テル・アル＝ダバアの d/1 層（およそ 350 から 650 の範囲、平均 528.8）の例に近似する。この層は第 13 王朝の第 1 四半期に該当する（cf. Szafrański 1998: Fig.5）。

その他、図 8.31 は Marl C の大型の広口壺で、B 室のタフラ粒を含む黄色細砂の層（図 5-9）から出土した。内面、外面のほぼ全面にタフラが付着していたため、堀具のような用途で使用された可能性が高い。図 8.32 はシャフト部から発見された、Nile B2 による閉口器形のミニチュア土器の底部断片である。図 8.33 は Nile B2 の器台で、A 室のタフラ層（図 5-3）、シャフト部の A 室床面以下のレベル（図 5-4、5）から発見された断片で構成される。

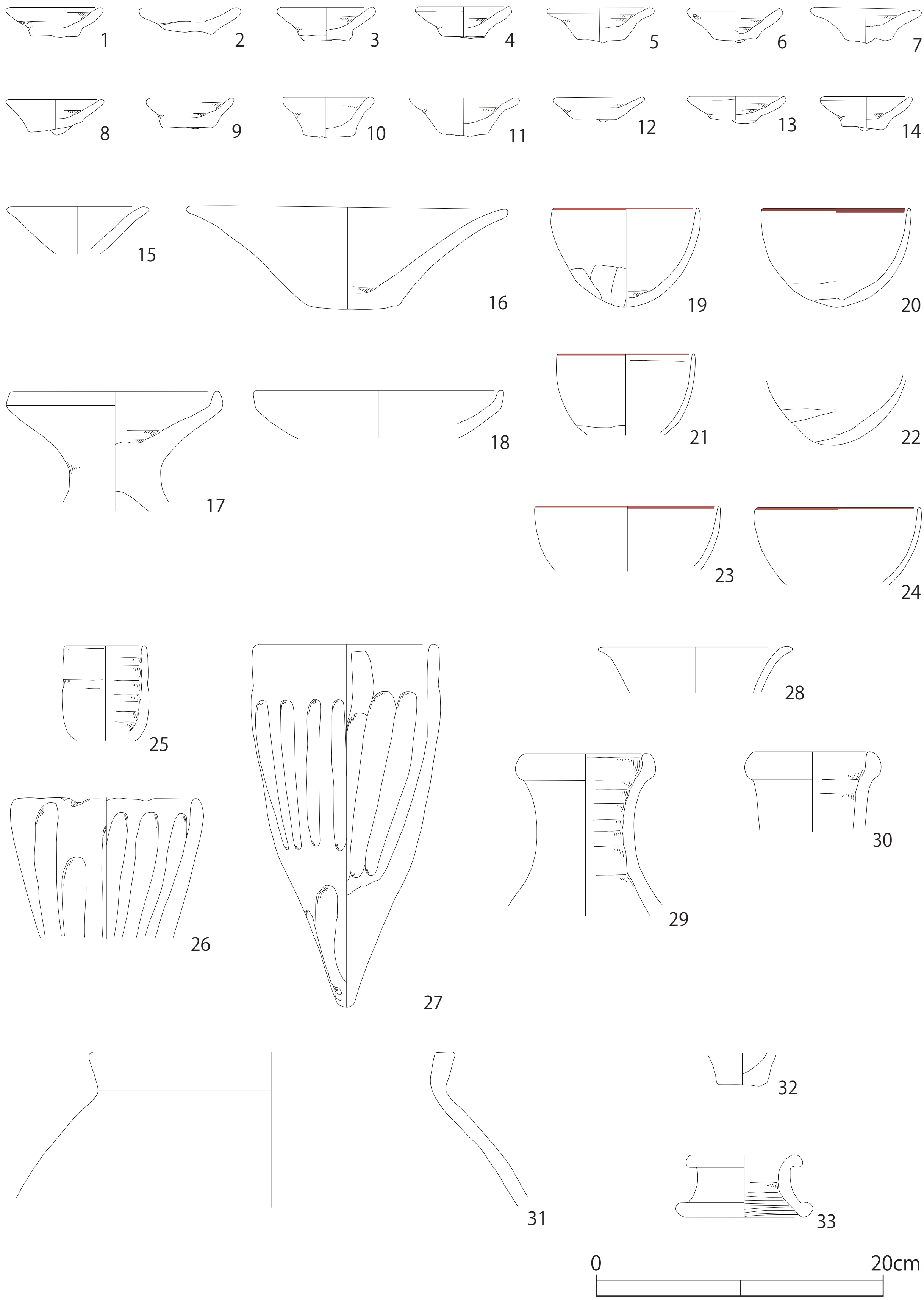


図 8　シャフト 151 出土土器
Fig.8 Pottery vessels from Shaft 151

③出土土器と遺構の特徴から推測されるシャフト151の拡張過程

シャフト151の顕著な特徴は、A、B、Cの各部屋がそれぞれ異なる高さに作られ、かつ南北交互に部屋が設けられている点である。土器の出土状況や年代からこれらの部屋が使用された過程について考察を試みたい。

前述の平底の鉢形土器（図8.16）は、類例から第12王朝初期からセンウセレト3世の治世（アメンエムハト3世との共同統治前[7)]）の範囲に年代づけられている。この土器の断片はC室タフラ層（図5-14）から出土しており、この層にはミイラマスクの断片も集中していた。更に床面の直上にある点から、これらの遺物はC室に埋葬されていた副葬品の一部と推測される。過去に指摘されているように、この墓地がセンウセレト3世ピラミッド周辺の墓地に埋葬された王族・高官と関係があった人々によって造営が開始されたならば（吉村他 2018: 153)、センウセレト3世治世頃の埋葬が存在することは不自然ではなく、平底の鉢形土器の年代とも矛盾しない。一方、ビール壺（図8.29、8.30）は、第13王朝第1四半期という年代を示していた。これらはシャフト部の堆積（図5-4、5、6）から出土しており、これらの層から出土した土器片にはA室タフラ層(図5-3)出土土器片と接合したものが少なくとも3個体あることが確認されている(図8.19、8.25、8.33)。即ちこの墓が盗掘を受けた後、本来A室にあった土器の一部がシャフト部に落下したと考えられ、図8.29、8.30もA室由来である可能性が高い。以上から、C室由来の土器とA室由来と推測される土器は、前者が第12王朝センウセレト3世治世、後者が第13王朝第1四半期に年代づけられ、シャフトの下部と上部で一定の時間的隔たりがあった可能性が示唆される。

次に、小型の半球形碗に着目したい。この器種は、口径と器高の比率である「ベッセル･インデックス（以下VI)」を用いた研究によって、年代が新しくなるにつれ浅い形状から深い形状へ変化していくことが知られている（Arnold 1982: 60-62, Abb.17; Arnold 1988: 140-141, Fig.75; Bietak 1984: 480-481, Fig.III.2; Schiestl and Seiler 2012: 84)。半球形碗の形状が深くなるにつれ、ベッセル･インデックスの数値は減少していく。シャフト151から出土した半球形碗の場合、図8.19、8.20のVIはそれぞれ150、152、図8.21、8.23、8.24は底部が欠損しているものの曲線から推定されるおおよその器高から算出してそれぞれ153、200、189という数値だった。図8.19、8.20、8.21の3点は近似する数値を示しているのに対し、図8.23、8.24はこれに比して明らかに浅い輪郭、即ちより古い時代の数値を示している。

図8.24はC室のタフラ層（図5-14）から発見された断片を含んでおり、C室に埋葬されていた副葬品に由来すると推測される。図8.23はB室の上層（図5-7）から出土した断片とシャフト部のタフラ層（図5-6）から出土している。B室はシャフト150掘削時に撹乱を受けており、その上層から発見された断片とシャフト部タフラ層出土断片だけの構成では､本来の帰属を推測することは難しい状況である。一方､図8.19はA室床面直上のタフラ層（図5-3）から出土した断片を含み、それ以外はA室床面レベルより下のシャフト部の堆積（図5-4、5、6）から発見されている。図8.19と類似する輪郭を持つ図8.20、8.21も、同様にA室床面レベルより下のシャフト部の堆積（図5-4、5、6）から出土している。既述の通り、このシャフト墓が盗掘を受けた後、本来A室にあった土器の断片の一部が、シャフト部に落下したと考えられることから、図8.20、8.21もA室から崩落した断片である可能性が指摘できる。ベッセル・インデックスでは、C室由来の図8.24が189という数値を示すのに対し、A室由来と推測される図8.19、8.20、8.21が150程度であり、器形の深浅の差が認められた。したがって、C室由来の半球形碗はA室由来と推測されるものより相対的に古いということが言える。

土器からC室が古く、A室が新しいという新旧関係が指摘されたが、B室については隣接するシャフト150からの土砂の流入があるため、出土遺物から新旧を検討することは難しい。しかし、上部の部屋ほど新

しいという傾向を受け入れるならば、それぞれの位置関係から C 室、B 室、A 室の順で使用されたという過程が想定される。本遺跡で発見された未盗掘のシャフト墓の調査成果から（Baba and Yazawa 2015）、墓は埋葬が行われた後、主に岩盤の掘削排土であるタフラでシャフト部が埋められていたと考えられる。また、本遺跡を対象とした既往の研究（柏木 2009）では、シャフトの掘削と地下室の掘削は同時ではなく別々の計画で進められており、被葬者がまだ決定されていない状況、もしくは埋葬される人物は決まっていてもその存命中にシャフトの掘削だけが先に進められた可能性が提示されている。言い換えれば、埋葬が行われる直前の段階で地下室が仕上げられたということになる。これらの前提に立脚すれば、最初に C 室で埋葬が行われた後にシャフトはタフラで一旦埋められ、追葬が行われた際に詰められたシャフト部のタフラは C 室より上のレベルまで取り除かれ、B 室の掘削と埋葬が行われた。その後再びシャフトはタフラによって埋められた。更に A 室を利用した追々葬では、同様に B 室の天井よりも上のレベルまでタフラが取り除かれ、埋葬終了後に再度シャフトは埋められたと推測される。このような拡張過程を想定した場合、C 室天井レベルと B 室床面レベルの差、および B 室天井レベルと A 室床面レベルの差がどちらも約 0.4m で、一定の間隔が開けられているのは、追葬時に下にある部屋の埋葬を荒らさないように配慮した結果と見ることもできるだろう。また、南北交互に部屋が掘削されているのは、部屋の近接による崩落を回避するための措置と解釈することもできる。

その場合、部屋が南北交互に作られ、C 室と B 室、B 室と A 室の間隔が同一であることから、この墓の過去の利用状況を把握していた人々が、墓の造営に関与していた可能性が挙げられる。既存の埋葬を撹乱しない形で追葬が行われた様子からも、血縁者など生前に親密な関係があった人々によって墓が共有されていた可能性は大いに考えられるが、被葬者の関係を明確に示す出土資料は今のところ得られていない。

(3) シャフト 152

①遺構の概要（図 9）

シャフト 152 はグリッド 3E97a から c に跨っており、シャフトの平面は南北 2.1m、東西 0.7m で長軸の方向は概ね南北である。シャフトの深さは 2.2m であり、埋葬室は作られていない。

シャフト 152 は既に盗掘を受けていたと考えられ、底部まで風成の細砂が堆積し、人骨、土器片、彩色プラスター片などが含まれていた。底部付近で木棺片が出土していたことから、被葬者は木棺に収められ、シャフト底部に安置されていたと推測される。また、白色プラスターで形作られた等身大の右耳の断片が出土しており、ミイラマスクもしくは人型木棺が使用されていたと考えられる。類似する耳形のプラスター製品は約 5m 北東にあるシャフト 151 の C 室タフラ層からも出土しており、シャフト 151C 室とシャフト 152 は時期が近い可能性がある。土器は中王国時代のビール壺の断片が含まれており、アメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に年代づけられる。

②出土遺物

a) 白色プラスター製耳断片（図 10）

プラスター製の右耳の上側断片で、表側は黒色で塗られており、裏側にはマスクあるいは人型木棺頭部に接着されていた面にモルタルが付着していた。裏側には一部淡青色の顔料が付着していた。これらの特徴から、おそらくミイラマスクまた人型木棺の肌は黒色で表現され、鬘部分は淡青色で塗られていたと考えられる。

b) 土器（図 11）

出土した土器からは、2 個体分の大型壺の口縁部断片が確認された。中王国時代のいわゆるビール壺であり、胎土は Nile C、頸部が僅かに外反し、断面が三角形を呈する口縁部を有する。形状からアメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に年代づけられる [8)]。

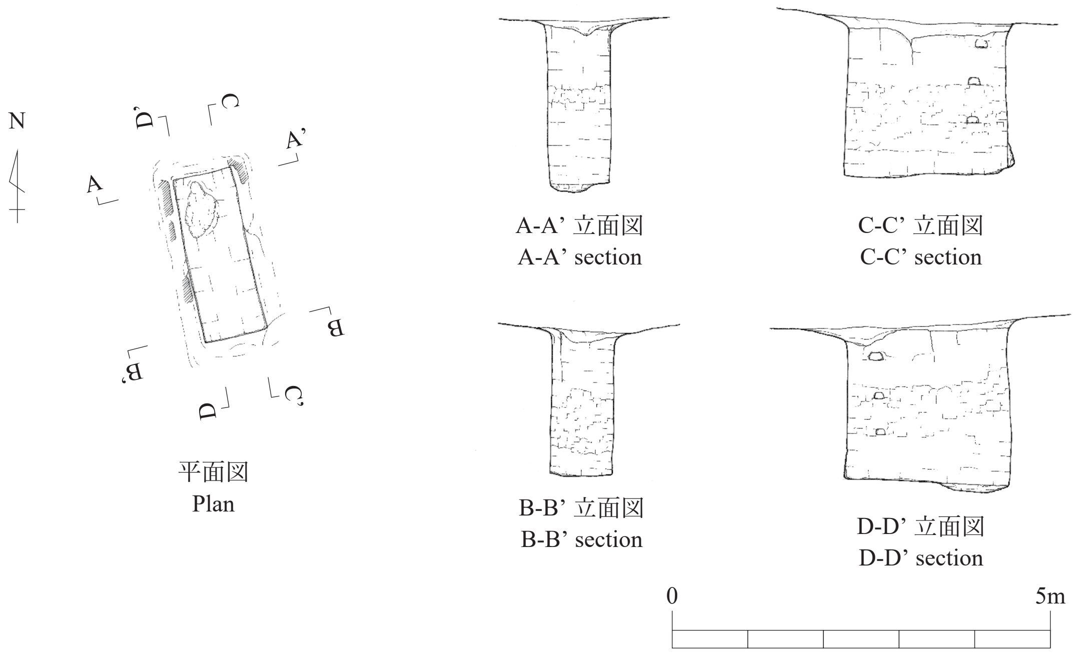


図 9　シャフト 152 平面・立面図
Fig.9 Plan and sections of Shaft 152

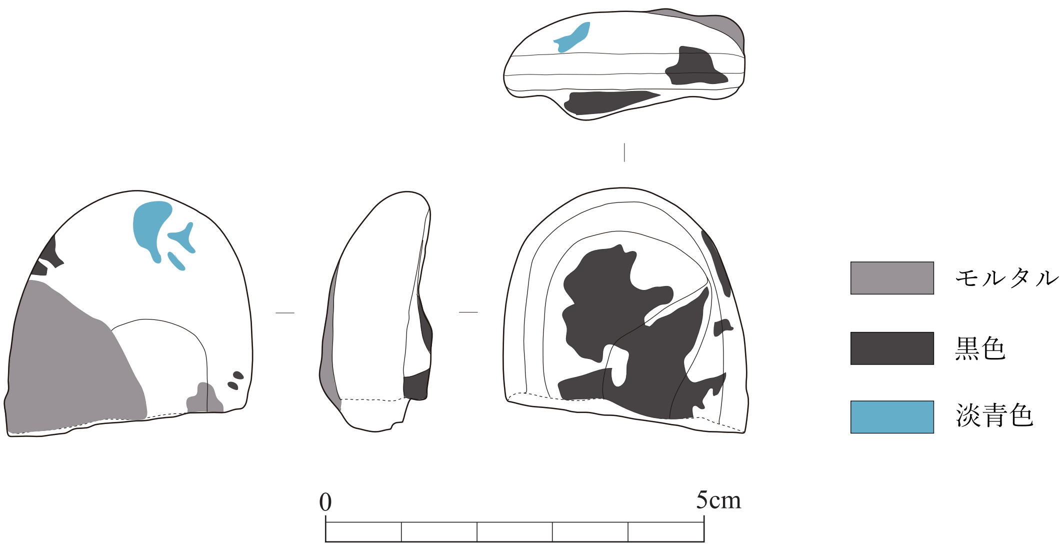


図 10　シャフト 152 出土プラスター製耳
Fig.10 A plaster ear from Shaft 152

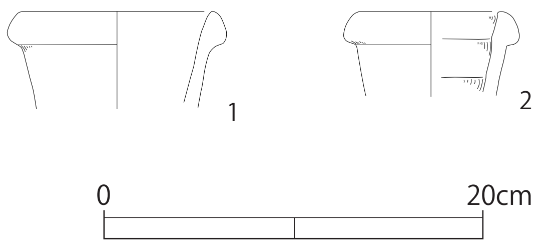


図 11　シャフト 152 出土土器
Fig.11 Pottery vessels from Shaft 152

(4) シャフト 153

①遺構の概要（図 12）

シャフト 153 はグリッド 3F07b 南東端に位置しており、シャフトの平面は南北 2.0m、東西 0.9m で長軸の方向は南北である。シャフト部の深さは 4.3m で、底部から北側に埋葬室が設けられていた（A 室）。A 室の平面は南北 2.0m、東西 0.9m で、天井高は 1.1m であった。

シャフト 153 は既に盗掘を受け、シャフト部と A 室には細砂が堆積し、A 室の床面付近にはほぼタフラで構成される層が認められた。人骨がシャフト部と A 室の両方で出土しており、シャフト部では様々な高さで人骨が断続的に出土するという特徴が見られた。その他、土器片、木片、プラスター片が出土した。A 室とシャフト部から出土した土器片には、大型の鉢や中王国時代のビール壺の断片が含まれていた。頸部の形状はアメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に年代づけられると考えられ、この時期に埋葬が行われたと推測される。

②出土遺物（図 13）

図 13.1 はシャフト部で発見された Nile C の大型鉢の断片であり、図 13.2 は A 室のタフラ層から出土した Nile B2 の大型鉢もしくは碗の口縁部断片である。図 13.3 と 13.4 は中王国時代のビール壺であり、どちらもシャフト部と A 室から発見された断片で構成され、後者は地上部（3F07b）から出土した断片も接合した。図 13.3 の頸部は僅かに外反し、断面が三角形を呈する口縁であり、形状からアメンエムハト 3 世治世から第 13 王朝初期に年代づけられる [9]。

(5) シャフト 155

①遺構の概要（図 14）

シャフト 155 は 3E98c から d にまたがっており、シャフトの平面は南北 2.1m、東西 0.9m で長軸の方向は南北である。シャフトの深さは 3.4m で、底部はシャフト部の西面、北西側が拡張されていた。拡張された部分の平面は南北 2.4m、東西 0.8m、床面から拡張部の天井までの高さは 1.1m である。拡張部の南半は僅かに掘り窪められていた。

シャフト 155 は既に盗掘されており、シャフト部の堆積は細砂が主で、下部ではタフラ粒が混入していた。シャフト底部の床面上には締まりの強いタフラの層が堆積していた。土器片、木片、人骨、カルトナージュ片、プラスター片などが出土し、床面上のタフラ層からは等身大の木製の耳が発見された。この耳はミイラマスクもしくは人型木棺の一部と考えられる。土器は口縁上部に赤彩を持つ半球形の碗とビール壺が含まれており、両者とも中王国時代の典型的な器形で、埋葬がこの時代に執り行われたことを示している。

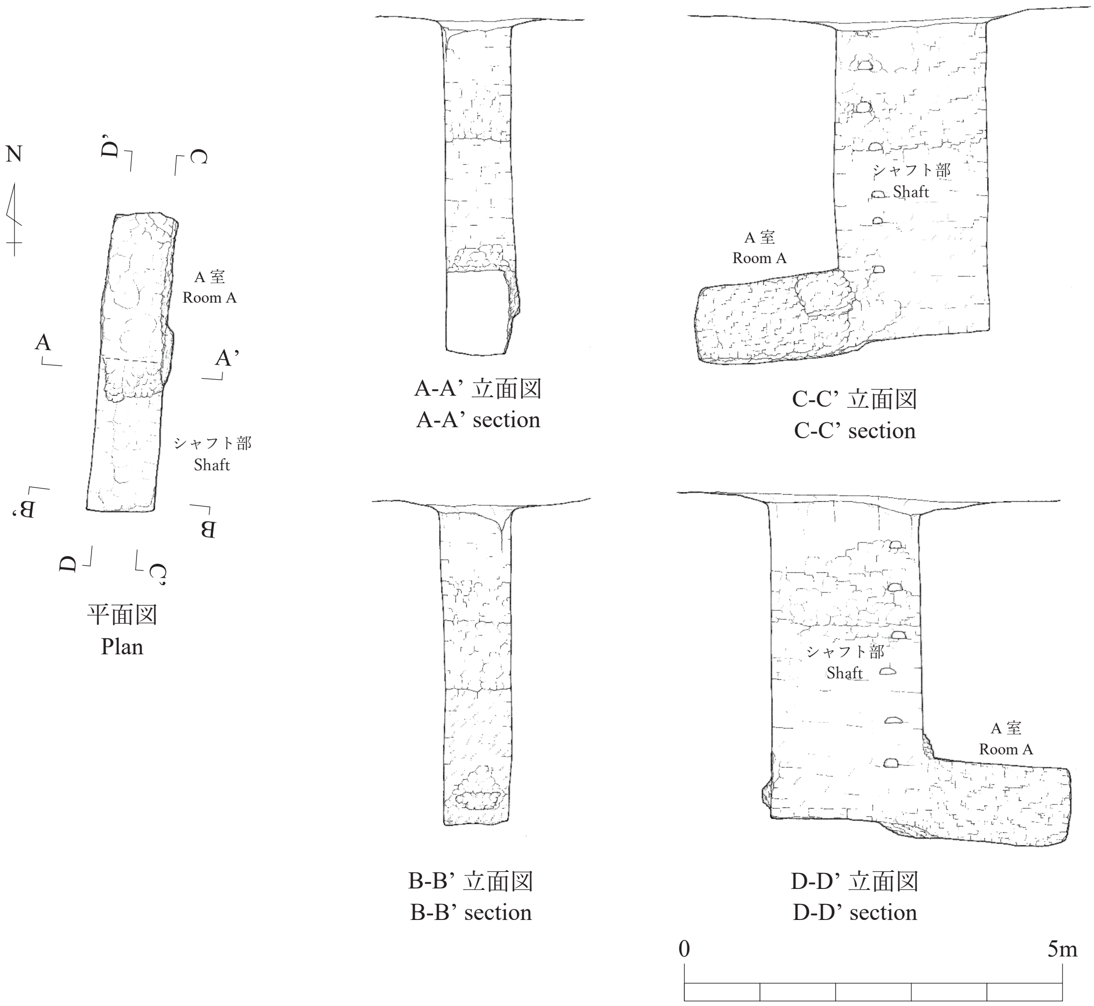


図 12　シャフト 153 平面・立面図
Fig.12 Plan and sections of Shaft 153

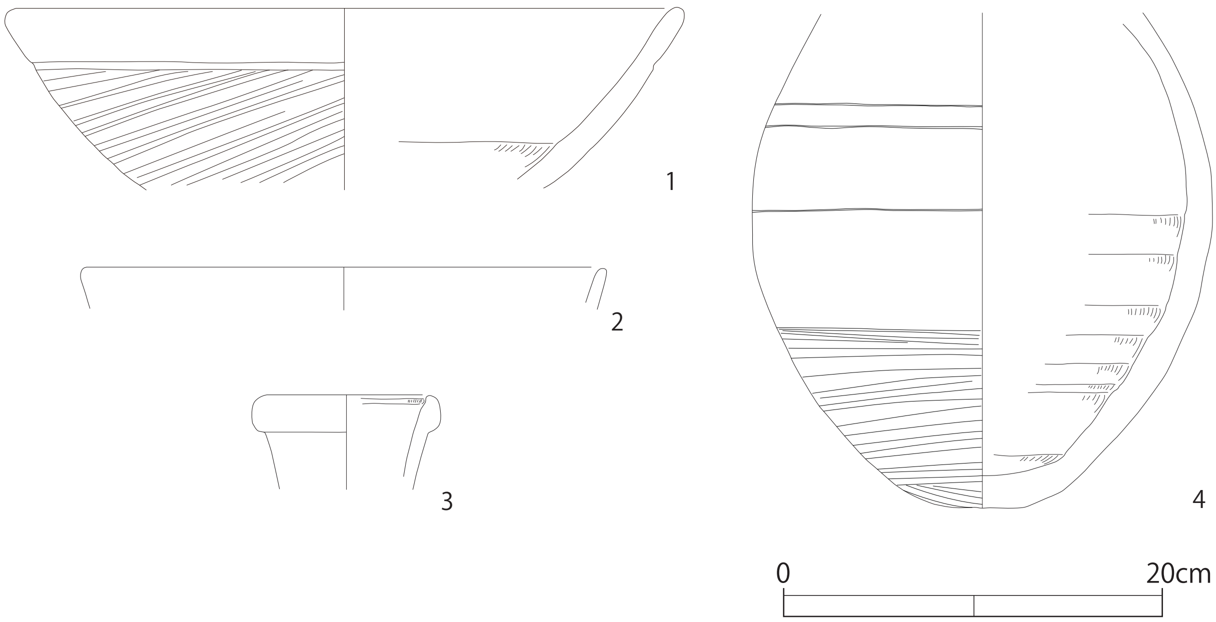


図 13　シャフト 153 出土土器
Fig.13 Pottery vessels from Shaft 153

②出土遺物

a) 木製耳（図 15）

彫刻による等身大の木製の右耳であり、シャフト床面上のタフラ層から出土した。表側の面には彩色は残っておらず、木目が露呈していた。裏側にはミイラマスクもしくは人型木棺頭部への接着に使用されたと考えられる白色モルタルが付着していた。また裏側には黒の彩色が残っており、本来は表面も黒に塗られていた可能性がある。

b) 土器（図 16）

図 16.1 はタフラ層から出土した半球形の碗の断片である。胎土は Nile B1 であり、口縁上端部に赤彩が施されていた。図 16.2、16.3 は中王国時代のビール壺の断片であり、両者は接合しないものの、特徴から同一の個体と推定される。両者はシャフト下部のタフラを含む砂層と、床面上のタフラ層から出土した断片で構成される。どちらも中王国時代の典型的な器形である。半球形の腕は上述のように最大径と器高の比率（VI）から時期を推定する研究が行われているが、図 16.1 は胴下部が欠損しているため正確な値は不明である。口縁部の赤彩は第 12 王朝後半以降に多い特徴とされている（Schiestl and Seiler 2012: 86）。ビール壺は時期推定の要となる頸部が失われているため、埋葬の年代を示す根拠にはならなかった。

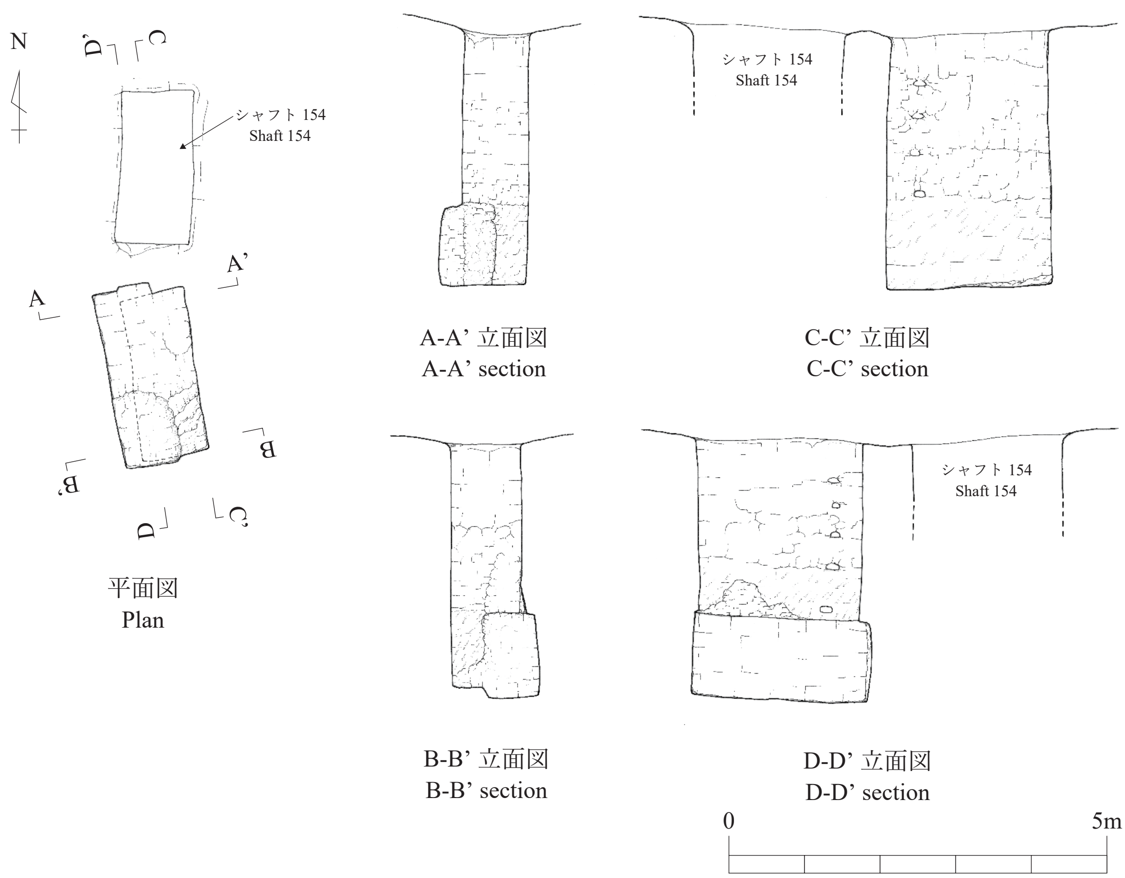


図 14　シャフト 155 平面・立面図
Fig.14 Plan and sections of Shaft 155

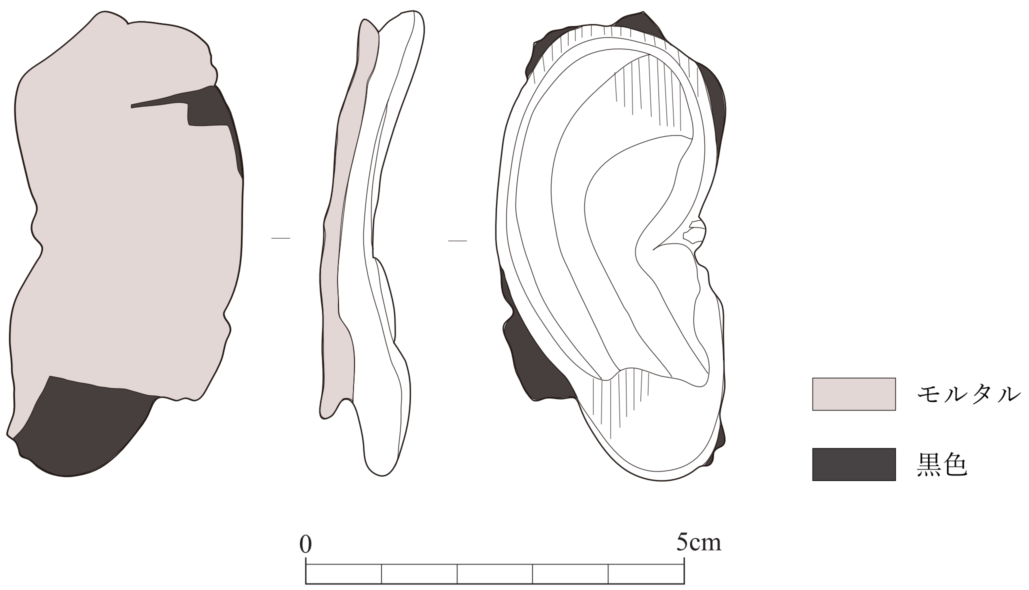


図15 シャフト155出土木製耳
Fig.15 A plaster ear from Shaft 155

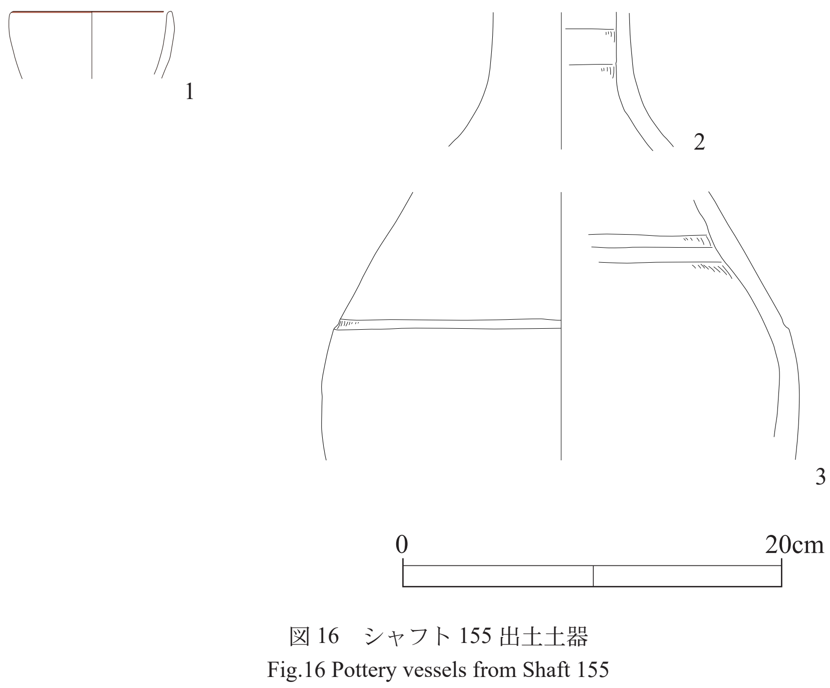


図16 シャフト155出土土器
Fig.16 Pottery vessels from Shaft 155

4. おわりに

第 25 次調査では遺跡北端中央部を調査した結果、中王国時代と新王国時代のシャフト墓が発見された。

中王国時代のシャフト墓で特筆されるのはシャフト 151 である。2 つの部屋が設けられた中王国時代のシャフト墓はこれまでにも発見されていたが、シャフト 151 のような 3 つの部屋が上中下に配置された例は本遺跡では初出である。また上層と下層の部屋に収められたと推測される土器の新旧関係から、下層の埋葬が古く、上層の埋葬が新しいと想定された。遺構の特徴や既往の研究成果を勘合すると、最初に最下層の部屋で埋葬が行われ、シャフトが埋められた後、追葬が行われる度にシャフト部は既存の埋葬を撹乱しない深さまで掘り返され、部屋の掘削と埋葬が行われた後に再度シャフトが埋められた可能性が考えられる。他遺跡でも複数の部屋を持つ中王国時代のシャフト墓は発見されているが、その拡張と使用のプロセスについて考古学的に検討された例はなく、シャフト 151 の調査成果は注目に値する。このような墓利用のプロセスを想定した場合、被葬者どうしの関係は重要な問題であり、今後検討を要する。

今回の調査で発見された新王国時代の墓はシャフト 150 のみであった。この墓には明確な埋葬の痕跡が見られないが、発見された土器は第 18 王朝中期以前の年代を示しており、本遺跡における新王国時代の活動の中で最古級に位置付けられる。今後近傍の墓の発掘を進めることで資料を拡充し、今期調査区における新王国時代の様相を明らかにすることが望まれる。

謝辞

本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究（A）「葬制から見た古代エジプト文明の変化とその社会的背景に関する学際的研究」（研究代表者：吉村作治、課題番号：26257010）、及び若手研究（B）「図像・碑文資料と考古遺物の比較による古代エジプトの供物奉献儀礼の研究」（研究代表者：矢澤健、課題番号：16K16943）の助成を受けて実施された。エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カーリッド・アル＝エナニー閣下（博士）、外国調査隊管轄事務局長ムハンマド・イスマイール博士、サッカラ査察局のサブリ・ファラグ氏、ハニー・アル＝タイブ博士、チーフ・インスペクターのムハンマド・ユーセフ博士およびムハンマド・ヘンダウイ氏、サッカラのセリーム・ハッサン遺物収蔵庫の館長ラガブ・トゥルキ氏、第 25 次調査の査察官マルワン・アブー・バクル氏に多大なご支援、ご協力をいただいた（肩書きは調査時のもの）。ここに記して感謝の意を表したい。

註

1) リモートセンシングを応用したダハシュール北遺跡の発見については早稲田大学エジプト学研究所 2003 を参照。第 1 次から第 13 次調査にかけての発掘調査の概要と文献については吉村 2011 にまとめられている。以降の調査は、第 14 次（吉村、近藤、長谷川他　2011）、第 15 次（吉村、近藤、矢澤他 2011）、第 16・17 次（吉村他 2012）、第 18 次（吉村他 2013）、第 19 次（吉村他 2014）、第 22 次（吉村他 2016; Yoshimura et al. 2016a）、第 23 次（Yoshimura et al. 2016b; 吉村他 2017）、第 24 次（Yoshimura et al. 2018b; 吉村他 2018）が実施されている。第 20・21 次は倉庫における遺物整理調査であったため、概要報告はない。中王国時代の埋葬については Baba and Yoshimura 2010, 2011、Baba 2014、Baba and Yazawa 2015、Yoshimura and Baba 2015、矢澤、吉村 2016、Yazawa 2017、Yoshimura et al. 2018a にまとめられている。

2) 第 25 次調査は 2018 年 2 月に実施された。調査隊の構成は次の通りである。隊長：吉村作治、現場主任：矢澤健、考古学班：近藤二郎、山崎世理愛、石崎野々花、有村元春、建築学班：柏木裕之、人類学班：馬場悠男、坂上和弘、広報：岩出まゆみ、事務局：山田綾乃、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。

3) 胎土の分類はウィーン・システムに準拠している（Nordström and Bourriau 1993: 168-182）。以降の土器の胎土に関する記述も同様である。

4) 図 5 のシャフト 151 堆積断面図はセクションの観察によって作成されたものではなく、発掘の過程で層の変わり目を記録していった情報を元に復元されたものである。
5) 図 8.1 ～ 14 の内、図 8.2、8.3、8.10 は Nile B2 であり、それ以外は Nile C である。
6) 中王国時代のビール壺の概要については次にまとめられている（Schiestl and Seiler 2012: 640-643）。
7) 中王国時代第 12 王朝における共同統治の有無、センウセレト 3 世とアメンエムハト 3 世の共同統治の有無については議論が行われてきたが、近年の調査・分析によって共同統治が行われていた蓋然性が高まっている（Schneider 2006: 170-175）。
8) R. シストル（Schiestl）と A. ザイラー（Seiler）の Class3d に相当すると考えられる（Schiestl and Seiler 2012: 660-661）。
9) R. シストルと A. ザイラーの Class3d に相当すると考えられる（Schiestl and Seiler 2012: 660-661）。

参考文献

Arnold, Do.

1982 “Keramikbearbeitung in Dahschur 1976–1981,” *Mitteilungen der Deutschen Archaeologischen Instituts, Abteilung Kairo* 38, pp.25-65.

1988 “Pottery”, in Arnold, Di. (ed.), *The South Cemeteries of Lisht, Vol.I: The Pyramid of Senwosret I*, New York, pp.106-149.

Baba, M

2014 “Intact Middle Kingdom Burial of Senu found at Dahshur North”, in Kondo, J. (ed.), *Quest for the Dream of the Pharaohs: Studies in Honour of Sakuji Yoshimura*, Cairo, pp.35-48.

Baba, M. and Yazawa, K.

2015 “Burial Assemblage of the Late Middle Kingdom shaft-tombs in Dahshur North”, in Grajetzki, W. and Miniaci, G. (eds.), *The World of Middle Kingdom Egypt, Middle Kingdom Studies* 1, London, pp.1-24.

Baba, M. and Yoshimura, S.

2010 “Dahshur North: Intact Middle and New Kingdom Coffins”, *Egyptian Archaeology* 37 (Autumn), pp.9-12.

2011 “Ritual Activities in Middle Kingdom Egypt: A View from Intact Tombs Discovered at Dahshur North”, in Bárta, M., Coppens, F. and Krejcí, J., (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2010*, vol.1, Prague, pp.158-170.

Bader, B.

2009 *Tell el-Dabʿa XIX: Avaris und Memphis im Mittleren Reich und in der Hyksoszeit. Vergleichsanalyse der materiellen Kultur*, Wien.

Bietak, M.

1984 “Problems of Middle Bronze Age Chronology: New Evidence from Egypt,” *American Journal of Archaeology* 88, No.4, pp.471-485.

Bourriau, J.

2010 *The Survey of Memphis IV. Kom Rabia: The New Kingdom Pottery*, London.

Holthoer, R.

1977 *New Kingdom Pharaonic Sites: The Pottery*, Stockholm.

Hope, C.A.

1989 *Pottery of the Egyptian New Kingdom: Three Studies*, Burwood.

Lacau, P.

1903-1904 *Sarcophages antérieurs au Nouvel Empire* I, Cairo.

Nordström, H.A. and Bourriau, J.

1993 “Ceramic Technology: Clay and Fabrics,” in Arnold, Do. and Bourriau, J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery, Mainz*, pp.143-190.

Rose, P.

2016 “9: The Ceramics from Shaft I”, in Strudwick, N (ed.), *The Tomb of Pharaoh’s Chancellor Senneferi at Thebes (TT99), Vol. I, The New Kingdom*, Oxford, pp.191-238.

Schiestl, R. and Seiler, A.

2012 *Handbook of Pottery of the Egyptian Middle Kingdom. Vol.I: The Corpus Volume*, Vienna.

Schneider, T.

2006 “The Relative Chronology of the Middle Kingdom and the Hyksos Period (DYNS. 12-17),” in Hornung, E., Krauss R. and Warburton, D.A. (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, Leiden and Boston, pp.168-196.

Szafrański, Z.E.

1998 “Seriation and Aperture Index 2 of the Beer Bottles from tell El-Dabʿa,” *Ägypten und Levante* 7, pp.95-119.

Williams, B.B.

1992 *New Kingdom Remains from Cemeteries R, V, S and W at Qustul and Cemetery K at Adindan*, Chicago and Illinois.

Yazawa, K.

2017 “The late Middle Kingdom shaft tombs in Dahshur North”, in Bárta M., Coppens, F. and Krejcí J. (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2015*, Prague, pp.531-544.

Yoshimura, S. and Baba, M.

2015 “Recent Discoveries of intact tombs at Dahshur North: Burial customs of the Middle and New kingdoms”, in Kousoulis P. and Lazaridis N. (eds.), *Proceedings of the Tenth International Congress of Egyptologists, University of the Aegean, Rhodes, 22-29 May 2008, Orientalia Lovaniensia Analecta* 241, pp.541-556.

Yoshimura, S., Baba, M., Yazawa, K., Jaeschke, S. and Uda, M.

2018a “Intact Middle Kingdom Anthropoid Coffin of Sobekhat from Dahshur North: Discovery, Conservation and X-Ray Analysis”, The Journal of Egyptian Studies 24, pp.158-177.

Yoshimura, S., Yazawa, K., Kondo, J., Kashiwagi, H., Takenouchi, K., Matsunaga, S. and Yamazaki, S.

2016b “Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-third Season, 2015”, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Higashi Nippon International University* 1, pp.3-22.

Yoshimura, S., Yazawa, K., Kondo, J., Kashiwagi, H., Takenouchi, K. and Yamazaki, S.

2016a “Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-second Season, 2015”, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Higashi Nippon International University* 1, pp.3-19.

Yoshimura, S., Yazawa, K., Kondo, J., Kashiwagi, H., Yamazaki, S., Ishizaki, N. and Arimura, M.

2018b “Brief Report of the Excavations at Dahshur North: Twenty-fourth Season, 2017”, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association, Higashi Nippon International University* 3, pp.3-38.

柏木裕之

2009 「エジプト、ダハシュール北遺跡から発見されたシャフト墓の掘削工程について」、『西アジア考古学』第 10 号、pp.19-32

矢澤 健、吉村作治

2016 「エジプト・ダハシュール北遺跡の中王国時代のシャフト墓について－遺構の形状・規模・分布の分析－」、『オリエント』第 58 巻 第 2 号、pp.196-210.

吉村作治

2011 「Ⅰ．はじめに」、『エジプト学研究』別冊第 15 号、pp.9-14.

吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子

2011「Ⅱ．第 14 次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第 15 号、pp.15-60.

吉村作治、近藤二郎、矢澤 健、柏木裕之、秋山淑子

2011「Ⅲ．第 15 次調査概要」、『エジプト学研究』別冊第 15 号、pp.61-83.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、柏木裕之、竹野内恵太、山崎世理愛

2016「エジプト　ダハシュール北遺跡調査報告－第 22 次調査－」、『エジプト学研究』第 22 号、pp.91-112.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、柏木裕之、竹野内恵太、松永修平、山崎世理愛

2017「エジプト　ダハシュール北遺跡調査報告－第 23 次調査－」、『エジプト学研究』第 23 号、pp.3-25.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、柏木裕之、山崎世理愛、石崎野々花、有村元春

2018「エジプト　ダハシュール北遺跡調査報告－第 24 次調査－」、『エジプト学研究』第 24 号、pp.113-157.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、馬場匡浩、西本真一、柏木裕之、秋山淑子

2012「エジプト　ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第16次・第17次発掘調査－」、『エジプト学研究』第18号、pp.21-67.

吉村作治、矢澤 健、近藤二郎、西本真一

2013「エジプト　ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第18次発掘調査－」、『エジプト学研究』第19号、pp.15-43.

2014「エジプト　ダハシュール北遺跡発掘調査報告－第19次発掘調査－」、『エジプト学研究』第20号、pp.15-43.

早稲田大学エジプト学研究所 編

2003 『ダハシュール北〔Ⅰ〕―宇宙考古学からの出発―』、Akht Press.

調査報告

第11次ルクソール西岸
アル＝コーカ地区調査概報

近藤　二郎＊1・吉村　作治＊2・菊地　敬夫＊3・柏木　裕之＊3
河合　望＊4・高橋　寿光＊5・米山　由夏＊6

Preliminary Report on the Eleventh Season of the Work at al-Khokha Area in the Theban Necropolis by the Waseda University Egyptian Expedition

Jiro Kondo*[1], Sakuji Yoshimura*[2], Takao Kikuchi*[3], Hiroyuki Kashiwagi*[3],
Nozomu Kawai*[4], Kazumitsu Takahashi*[5], and Yuka Yoneyama*[6]

Abstract

The team from the Institute of Egyptology at Waseda University has carried out clearance, conservation, and documentation at the tomb of Userhat, Overseer of King's Private Apartment under Amenhotep III (TT 47), and other tombs in the vicinity at Al-Khokha area in the Theban Necropolis since 2007. Although the tomb of Userhat is one of the most important private tombs from Amenhotep III's reign, no comprehensive scientific research has been undertaken because its exact location had become unknown even after Howard Carter wrote its short report in 1903.

In the previous seasons, we uncovered the entrance of the tomb of Userhat, which has the lintel and doorjambs on both sides. They were decorated with incised hieroglyphic inscriptions and the figures of the tomb owner, Userhat. We have also located the subterranean structure of the tomb through the clearance of the debris in a hole where the ceiling of the chamber has collapsed in the past. At the south side of the western rear wall of the transverse hall, we found a relief decoration which depicts Amenhotep III and Queen Tiye seated under a canopy. At the inner chamber, we found a dyad, probably of Userhat and his wife, carved in the south wall of the chamber.

We found an unfinished tomb (KHT01) to the south of the forecourt of the tomb of Userhat (TT47) in the course of our clearance. The entrance of KHT01 is hewn on the southern wall of the forecourt of TT47. It was found out that the tomb KHT01 leads to another tomb, the tomb of Khonsuemheb (KHT02) who has the title of the Chief of the Workshop and Chief Brewer of the Mut temple. We also discovered the tomb of Khonsu (KHT03), who has the title of the Royal Scribe, during our clearance at the east of the forecourt of the tomb of Userhat (TT47).

In this season, we conducted our clearance at the area above the transverse hall of tomb of Userhat (TT47),

＊1　早稲田大学文学学術院教授 / 早稲田大学エジプト学研究所所長
＊2　東日本国際大学学長 / 早稲田大学名誉教授
＊3　東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
＊4　金沢大学新学術創成研究機構准教授
＊5　東日本国際大学エジプト考古学研究所客員講師
＊6　鶴見大学大学院文学研究科博士後期課程

＊1　*Professor, Faculty of Letters, Arts and Sciences, Waseda University / Director, Institute of Egyptology, Waseda University*
＊2　*President, Higashinippon International University / Professor Emeritus, Waseda University*
＊3　*Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*
＊4　*Associate Professor, Institute for Frontier Science Initiative, Kanazawa University*
＊5　*Visiting Lecturer, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*
＊6　*Doctoral student, Department of Cultural Properties, Tsurumi University*

which is still covered by huge heap of debris, for the future conservation work inside the tomb. The conservation and engineering works were carried out in the unfinished tomb (KHT01) and the tomb of Khonsuemheb (KHT02) for its preservation.

Our clearance showed that the huge accumulation of limestone chips in the area above the transverse hall of tomb of Userhat (TT47) are related to the construction debris from surrounding tombs in antiquity. Clearance also revealed the limestone wall with mortar above the tomb of Userhat (TT47) and the stratigraphic observation suggests this limestone wall with mortar probably predates the tomb of Userhat (TT47). The stabilities of the unfinished tomb (KHT01) and the tomb of Khonsuemheb (KHT02) were increased by the engineering works and conservation treatments in the tombs.

1．はじめに

早稲田大学古代エジプト調査隊は、1972 年 1 月にエジプト・アラブ共和国、ルクソール西岸のマルカタ南遺跡で発掘調査を開始し、1974 年 1 月にコム・アル＝サマク（魚の丘）において、新王国時代第 18 王朝アメンヘテプ 3 世時代の彩色階段を発見した [1)]。この発見を受けて、アメンヘテプ 3 世時代をその後の主な研究対象とし、アメンヘテプ 3 世の王宮であるマルカタ王宮、アメンヘテプ 3 世時代のルクソール西岸の岩窟墓や王家の谷・アメンヘテプ 3 世王墓の調査など、当該時代の研究を進めてきた [2)]。

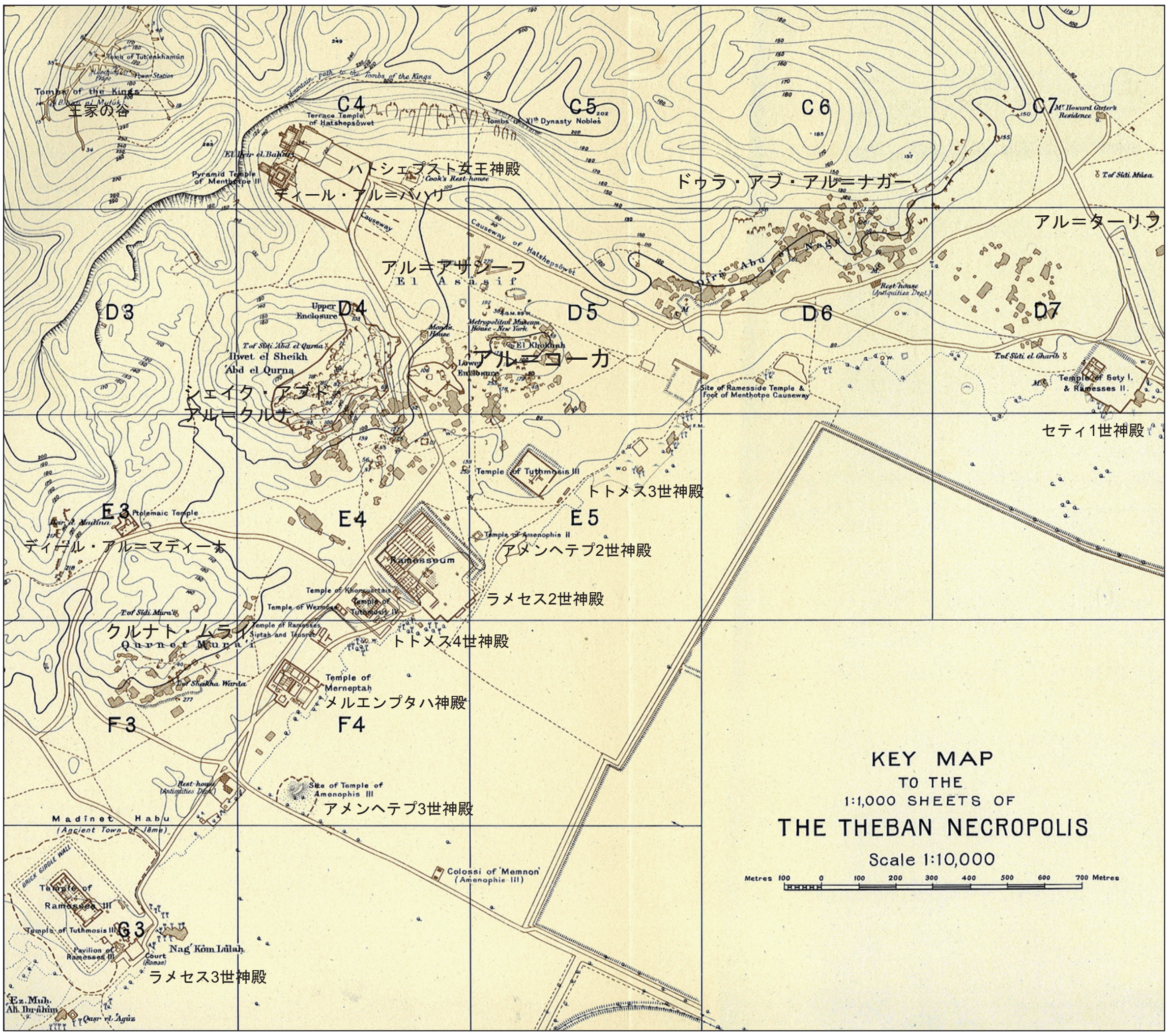


図 1　ルクソール西岸地図（Engelbach 1924: pl.II を一部改変、スケール 1:20,000）
Fig.1 Map of Theban Necropolis

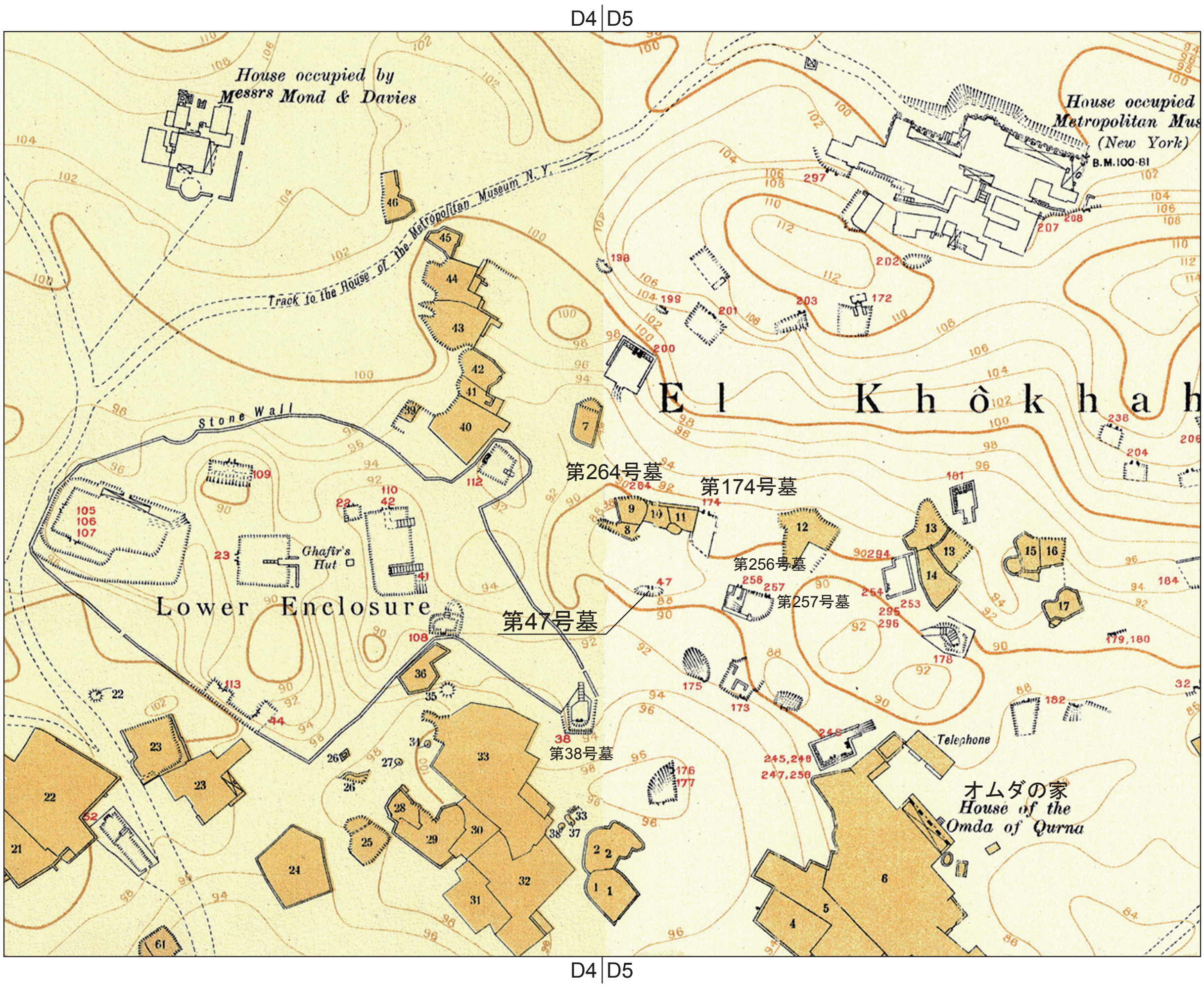


図 2　アル＝コーカ地区地図（Survey of Egypt 1924: Sheet D4, D5 を一部改変、スケール 1:2,000）
Fig.2 Map of al-Khokha area

こうしたアメンヘテプ 3 世時代の研究の一環として、早稲田大学エジプト学研究所は、2007 年度から新たにルクソール西岸、アル＝コーカ地区に位置するアメンヘテプ 3 世時代の岩窟墓、ウセルハト墓（TT47）を対象に調査を開始した（図 1, 2）。調査の対象としたウセルハト墓は、アメンヘテプ 3 世の後宮（ハーレム）の長官などを務めたウセルハトという人物の墓で、アメンヘテプ 3 世時代の高官墓に特徴的な、良質なレリーフ装飾と列柱を備えた大型岩窟墓の 1 つとして極めて重要である。本調査では、墓の構造、装飾、被葬者の称号、家族関係などを明らかにするとともに、これらの資料をもとに研究を実施し、同時代の大型岩窟墓の特質と発展を解明することを調査の目的とした [3)]。ウセルハト墓は H.A. ラインド（Rhind）や H. カーター（Carter）などの報告により、19 世紀からその存在が広く知られていたものの [4)]、総合的な調査は行われておらず、2007 年度の調査前の時点で墓は厚い堆積に覆われ、正確な位置すら不明となっていた。こうした状況を受けて早稲田大学エジプト学研究所は、2007 年 12 月にアル＝コーカ地区においてウセルハト墓の再発見・再調査を目的とした発掘調査を開始し、その後、調査を継続している。

これまでの調査により、ウセルハト墓を再発見するとともに、これまでカーターなどによって報告されていなかったウセルハト墓の詳細を明らかにすることができた（近藤他 2011; 2012; 2013; 2014; Kondo and Kawai 2017）。また、第 7 次調査では、ウセルハト墓の前庭部南壁から、新たに 2 基の岩窟墓、未装飾墓（KHT01）とコンスウエムヘブ墓（KHT02）を発見した（近藤他 2015; Kondo and Kawai 2017）。第 10 次調査において、

コンスウエムヘブ墓前庭部の発掘調査が進んだことにより、容易にアクセスが可能となり、本格的な保存修復作業を実施する準備が完了した。更に第 10 次調査では、ウセルハト墓の前庭部東側から新たにコンスウ墓（KHT03）を発見した（近藤他 2018）。

これまでの調査成果を受け、第 11 次調査では、主に 2 つの作業を行った。ひとつはウセルハト墓上部の発掘調査である。今後のウセルハト墓内部の発掘調査、保存修復作業に備え、墓にかかる荷重を減らすために、ウセルハト墓上部に堆積する土砂の発掘調査を実施した。もうひとつは、コンスウエムヘブ墓における保存修復作業、岩盤補強作業であり、今期調査から本格的な保存修復作業を開始した [5)]。

本稿では、こうした経緯と調査目的のもと、2017 年度にルクソール西岸アル = コーカ地区の第 47 号墓およびその周辺において実施した第 11 次調査について報告を行う [6)]。

2. ウセルハト墓およびコンスウエムヘブ墓の調査

今期調査では、ウセルハト墓の内部の発掘調査、保存修復作業に備え、墓の上部に堆積する土砂を発掘し、墓内部にかかる荷重を減少させることを目的とした。今回の発掘では、主にウセルハト墓の前室南側の上部の発掘調査を実施した（図 3）。

ウセルハト墓上部には、石灰岩チップ層が 6m ほど堆積している。この石灰岩チップ層は大きく 2 つに分けることができた。石灰岩チップ層の上層には、新王国時代第 19 王朝から第 20 王朝に年代付けられる土器が含まれており、その他に、墓の造営に使用されたと考えられるプラスターの入った土器、植物製の刷毛などが発見されている。こうしたところから、上層の石灰岩チップ層は、周辺の第 19 王朝から第 20 王朝の墓を掘削した際の排土であると考えられる。

また、石灰岩チップ層の下層からも、墓の造営に関連する遺物が出土しており、同じく墓を掘削した際の排土であると考えられる。出土した遺物は、掘削の際の目印と考えられる赤い線のある石灰岩片や木槌、青や緑色の顔料を含む土器片（おそらくパレットとして使用）、プラスターの入った土器などである。また、出土した土器群が第 18 王朝後期に年代付けられることから、石灰岩チップ層が周辺の第 18 王朝後期の岩窟墓の掘削排土である可能性が考えられる。

また、発掘調査の結果、ウセルハト墓前室南側の上部から、石灰岩片で作られた壁の一部が発見された（写真 1, 2）。前述の石灰岩チップ層は、この壁を覆うように堆積していたことから、少なくともこの壁自体は、第 18 王朝後期よりも前に年代付けることができる。今後、この壁周辺の発掘調査を進め、遺構の性格を明らかにしていく計画である。

更に、今期調査では、コンスウエムヘブ墓の保存修復に先立ち、前室の発掘調査も実施した。前室内部には、外部から流れ込んだ土砂が堆積しており、出土遺物も第 3 中間期に年代付けられるカルトナージュ片、シャブティ片などが主であった。その他、古代に崩落したコンスウエムヘブ墓の壁画の一部も発見された。これらは今後の保存修復作業によって、適切な位置に戻される計画である。

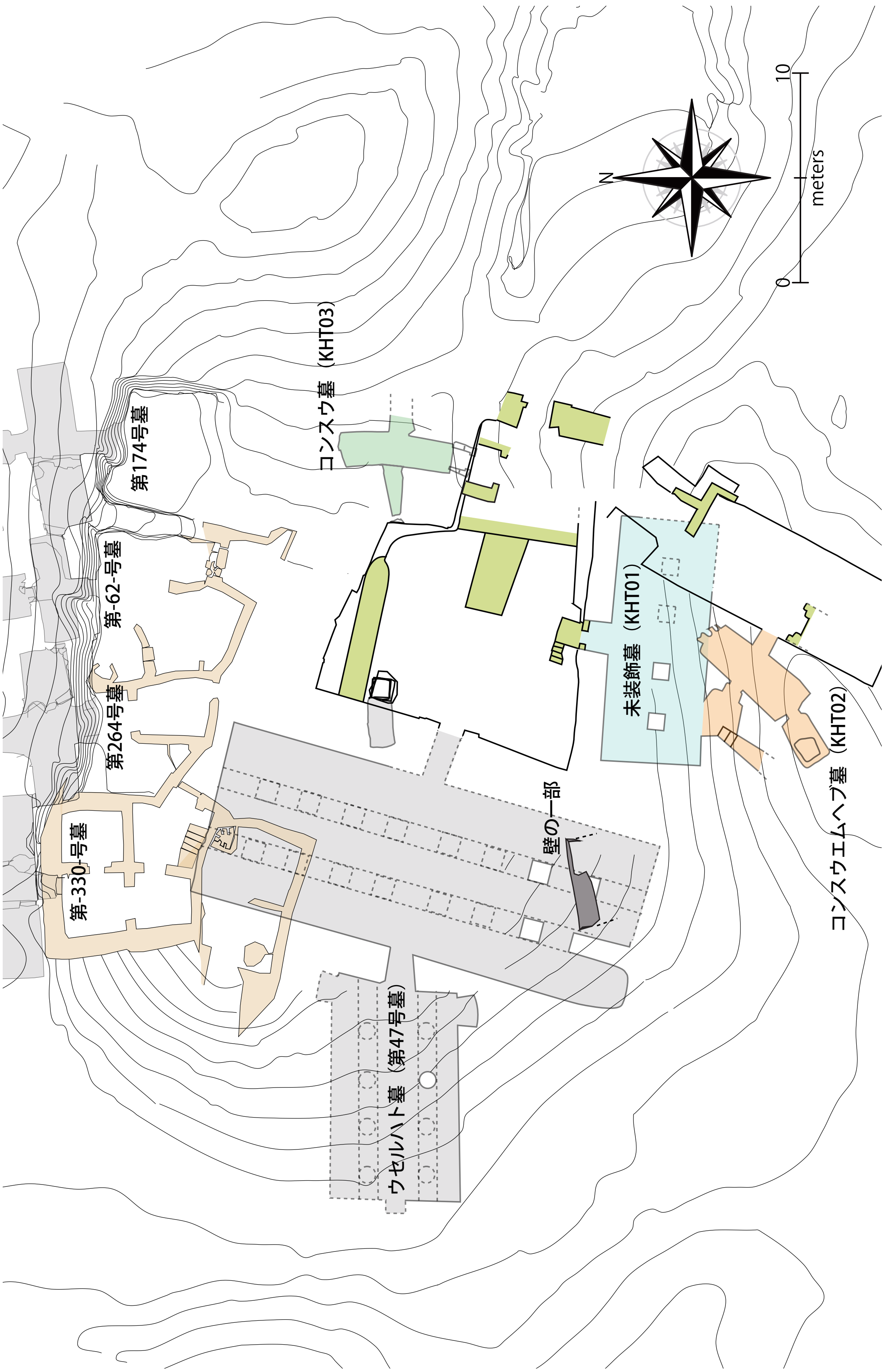


図 3　ウセルハト墓およびその周辺地図（第 11 次調査終了時）
Fig.3 Map of tomb of Userhat and its vicinity

写真 1　ウセルハト墓の前室上部、今期発掘調査終了時（北東から）
Pl.1 The area above the transverse hall of tomb of Userhat (TT47) after clearance, looking from northeast

写真 2　ウセルハト墓の前室上部、今期発掘調査終了時（北から）
Pl.2 The area above the transverse hall of tomb of Userhat (TT47) after clearance, looking from north

3. 出土遺物

以下では、今期調査において、ウセルハト墓上部およびコンスウエムヘブ墓内部の発掘調査で取り上げた遺物のうち、主要なものについて報告する。

(1) 木棺・カルトナージュ

寸法：高さ 8.1cm、幅 19.2cm、厚さ 3.5cm（図 4.1、写真 3）
　　　高さ 10.1cm、幅 13.1cm（図 4.2）
　　　高さ 6.9cm、幅 5.2cm（図 4.3、写真 4）
　　　高さ 6.9cm、幅 10.1cm（図 4.4）
時代：第 3 中間期（図 4.1–4）

今期調査では、ウセルハト墓上部およびコンスウエムヘブ墓前室内部から木棺片、カルトナージュ片が発見された。装飾などから第 3 中間期に年代付けられると考えられ、周辺の墓に由来すると考えられる。

木製の手は、もともと木棺に付属していたものである（図 4.1、写真 3)。類似した手首の部分に装飾のある木製の手は、アル＝コーカ地区の第 253 号墓からも出土しており、第 21 王朝から第 22 王朝初期に年代付けられている（Strudwick 1996: pl.56.253A.123, 253A.055, 57）[7)]。カルトナージュ片は、女神の羽、シェン・リング、バーで装飾されたものや（図 4.2)、ウジャトの眼が装飾されたもの（図 4.3、写真 4)、棺の鬘の部分のもの（図 4.4）などがある。いずれも黄色の背景に赤、青、緑、黒で装飾されており、こうした装飾は第 21 王朝に年代付けられる（Schreiber 2008: 55）[8)]。

(2) ファイアンス製アミュレット

寸法：高さ 1.8cm、幅 2.0cm（図 4.5）
時代：第 3 中間期（図 4.5）

今期調査では、ファイアンス製のアミュレットが出土した。濃い青地に、細部が黒で表現されたウジャトの眼などが出土している（図 4.5)。類似したウジャトの眼のアミュレットは第 3 中間期に年代付けられている（Müller-Winkler 1987: 170, S145)。

(3) ウシャブティ

寸法：高さ 5.5cm、幅 1.7cm、厚さ 1.3cm（図 4.6、写真 5）
　　　高さ 7.5cm、幅 2.9cm、厚さ 2.8cm（図 4.7）
　　　高さ 7.4cm、幅 4.6cm、厚さ 3.4cm（図 4.8）
時代：第 3 中間期（図 4.6–7、写真 5）

今期調査でも、ファイアンス製、テラコッタ製と土製のシャブティが出土した。類例などから第 3 中間期に年代付けられると考えられる。

ファイアンス製シャブティ（図 4.6、写真 5）は、アル＝コーカ地区の第 253 号墓、254 号墓、294 号墓の前庭部から類例が出土している（Strudwick 1996: 106, pl.37.ct.169a, c, d, 38.ct.169b, e）[9)]。テラコッタ製のシャブティはもともと腕を前で交差し、鍬を持っていたと考えられる（図 4.7)。類例は、同じくアル＝コーカ地区の第 253 号墓、294 号墓から知られている（Strudwick 1996: 115, 119, pl.36.ct.294.442, ct.253.118b）[10)]。土製のシャブティ（図 4.8）は、青緑の装飾があり、黒でおそらく被葬者の名前である ... *n Mwt* ...「... エンムウト」の文字が見られる。類似した土製の青緑の装飾のシャブティは、アル＝コーカ地区の第 32 号墓から、第 21 王朝の例が知られている（Schreiber 2008: pl.LIII.3.1.4.3）[11)]。

図 4　主要出土遺物（1）
Fig.4 Major finds (1)

(4) 葬送コーン

① *Wsr-ḥ3t*「ウセルハト」の葬送コーン

寸法：高さ 7.4cm、幅 9.5cm、長さ 21.2cm（図 5.1）

高さ 9.6cm、幅 9.7cm、長さ 9.3cm（図 5.2、写真 6）

時代：新王国時代アメンヘテプ 3 世（図 5.1, 2、写真 6）

今期調査でもウセルハトの葬送コーンが出土した（図 5.1, 2、写真 6; Davies and Macadam 1957: #406)。形状は末端がややすぼむ直方体であり、文字が押印されている先端には赤いスリップが施されている。

② *Nb-Imn*「ネブアメン」の葬送コーン

寸法：高さ 7.8cm、幅 8.5cm、厚さ 16.7cm（図 5.3、写真 7）

時代：新王国時代（図 5.3、写真 7）

ネブアメンの葬送コーンが出土した（図 5.3、写真 7; Davies and Macadam 1957: #553)。ネブアメンは *sš-nswt, imy-r rwyt, sš wdḥw imy-r šnwty*「王の書記、法廷の長、供物台の書記、2 つの穀倉庫の監督官」の称号を持つ人物で、年代と墓の位置は不明である。これまで第 3 次、第 8 次、第 9 次調査でも出土している（近藤他 2011: 55; 2016: 124, 図 6.10; 2017: 56, 図 9.2)。

(5) 木槌

寸法：高さ 7.5cm、幅 7.4cm、厚さ 6.7cm（図 6.1）

時代：新王国時代（図 6.1）

ウセルハト墓の前室上部の石灰岩チップ層から、木槌の破片が出土した（図 6.1)。今期調査では、計 2 点の破片が出土している。類似した木槌は、セドメント（Franzmeier 2017: 1662, no.2033/Wz/001）などから出土している。

(6) 封泥

寸法：高さ 14.5cm、幅 14.7cm、厚さ 12.2cm（図 6.2、写真 8）

時代：新王国時代（図 6.2、写真 8）

アンフォラの封泥がウセルハト墓の前室上部の石灰岩チップ層上層から出土した（図 6.2、写真 8)。封泥には、*rnn.wtt* [*nb.t*]-*k3 nfr ḏf3*「レネヌテト、食物の女主人、良き食物の供給者」の文字が押印されている。類似した封泥は、アマルナなどに見られる（Seyfried (ed.) 2012: cat.no.151, right)。

(7) カノポス壷

寸法：高さ 3.6cm、最大径 18.6cm（図 7.1、写真 9）

時代：新王国時代第 18 王朝中期（図 7.1、写真 9）

土器を白く塗り、黒で文字を描いたカノポス壷が出土した（図 7.1、写真 9)。胎土は、ウィーン・システムにおける Marl A2 胎土である。内部には、黒の樹脂が付着している。文字は壷の胴部に縦 2 行で、以下のように記されている。

一行目：... *ḥp.y z3* ...「... ハピ神、保護 ...」

二行目：... *ḥm-ntrntr-thj ? Ḥr*...「... 攻撃の神（？）の神官、ホル（？）...」

類似した Marl A2 胎土、白地に黒の文字の書かれたカノポス壷は、アル＝コーカ地区から知られており、第 18 王朝中期に年代付けられている（Schreiber 2008: pl.XXXIV.1.6.50–53)。

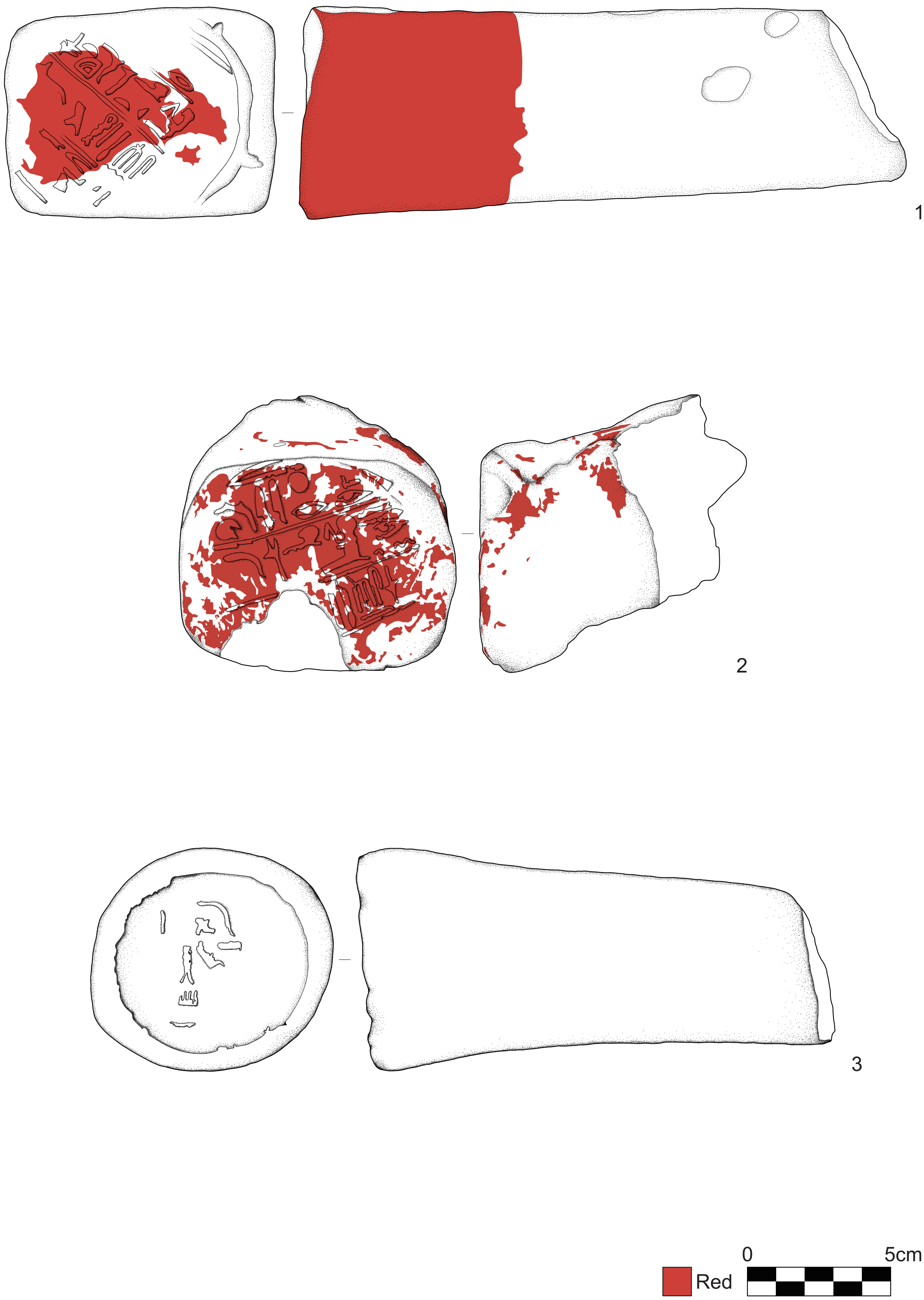


図 5 主要出土遺物（2）
Fig.5 Major finds (2)

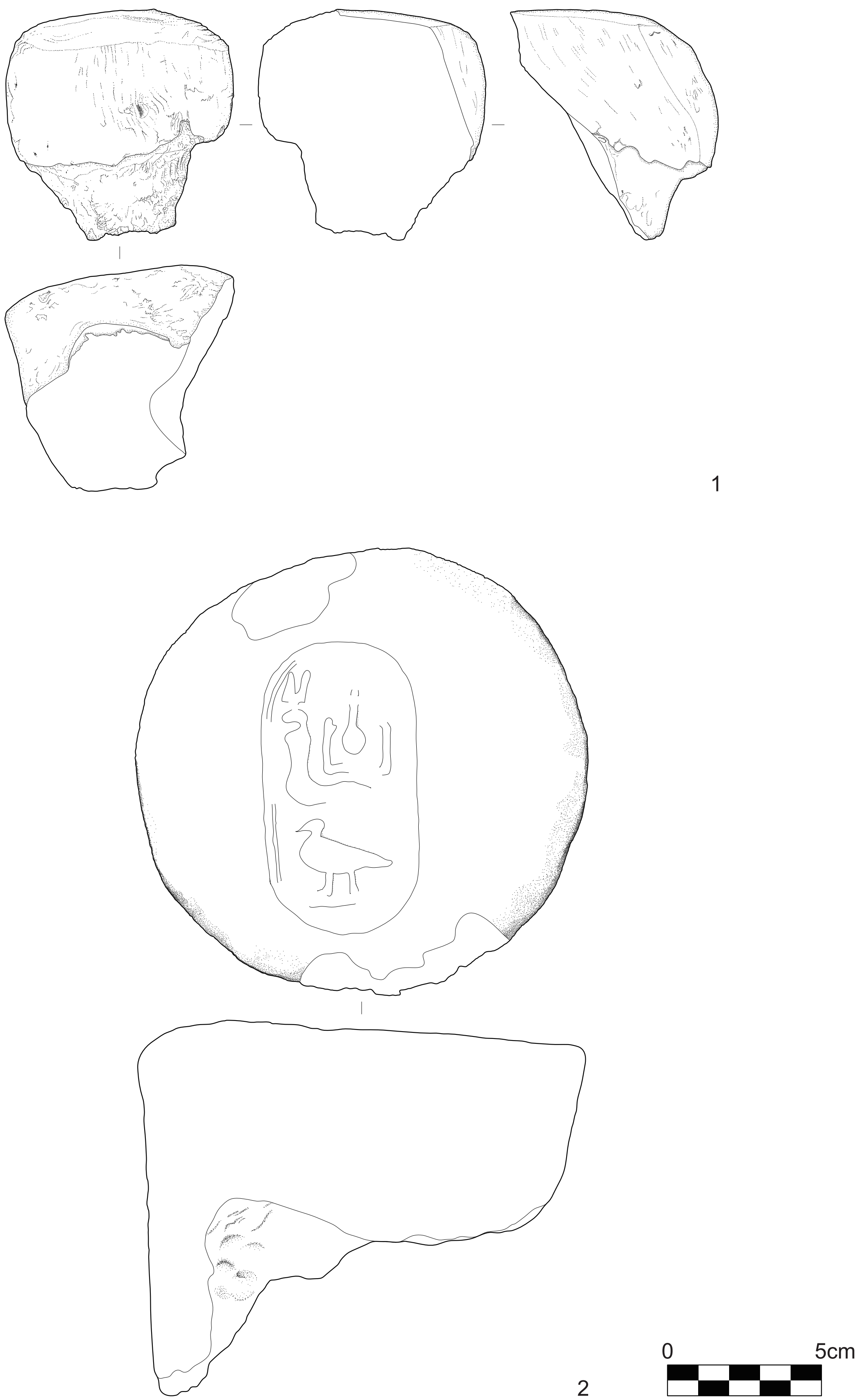


図 6　主要出土遺物（3）
Fig.6 Major finds (3)

写真 3　木棺片
Pl.3 Fragment of wooden coffin

写真 4　カルトナージュ棺片
Pl.4 Fragment of cartonage coffin

写真 5　ファイアンス製ウシャブティ
Pl.5 Faience shabti

写真 6　ウセルハトの葬送コーン
Pl.6 Funerary cone of *Wsr-ḥꜥt*

写真 7　ネブアメンの葬送コーン
Pl.7 Funerary cone of *Nb-Ỉmn*

写真 8　封泥
Pl.8 Mud jar sealing

（8） 土器[12)]

今期調査では、主にウセルハト墓の前室上部に堆積した石灰岩チップ層から土器が発見された。この石灰岩チップ層は、古代における墓掘削の排土と考えられ、大きく 2 つの層に分けることができる。

石灰岩チップ層の上層からは、新王国時代第 19 王朝から第 20 王朝に年代付けられる皿形土器（図 7.2）[13)]、波状頸部の青色彩文土器（図 7.3）、赤色のビール壷（図 7.4）[14)] などが出土している。皿形土器（図 7.2）は、口縁に赤色の装飾が施されており、底部には焼成後に孔が開けられている。また、内外に焼成の痕が見られる。孔や焼成の痕跡から、この皿形土器は何らかの儀式に使用されたと考えられる。また、波状頸部の土器（図 7.3）は、埋葬儀式に使用されたとされている（Nelson 2006: 122）。赤色のビール壷（図 7.4）には、供物として供えられたと考えられる泥が入っている。このように、石灰岩チップ層の上層から発見された土器群は、付近における儀式に使用された土器群と考えられ、おそらくウセルハト墓周辺の墓に由来するものと考えられる。

石灰岩チップ層の下層からは、皿形土器（図 7.5）[15)]、赤色のビール壷（図 7.6）[16)]、赤色の短頸壷形土器（図 7.7）[17)]、白色の高坏形土器（図 7.8、写真 10）[18)] などが出土している。類例などから、第 18 王朝後期に年代付けられる。皿形土器には、焼成後に孔が開けられ、内外に焼成の痕が見られる（図 7.5）。また、赤色のビール壷（図 7.6）には、内部に内容物である泥がある。赤色の短頸壷形土器にも孔が開けられている（図 7.7）[19)]。白色の高坏形土器（図 7.8、写真 10）は、内部に焼成の痕跡があり、また類例などから考えると、何らかの儀式に使用されたと考えられる。こうしたところから、石灰岩チップ層の下層から発見された土器も付近における儀式に使用された土器群と考えられる。

4. まとめ

2017 年度の第 11 次調査では、ウセルハト墓上部の発掘調査を行い、今後のウセルハト墓内部の発掘調査、保存修復作業に向けて、墓の上の土砂の加重を減らすことができた。また、発掘調査により、墓の上の土砂が古代における岩窟墓の掘削排土であることが明らかとなった。また、出土遺物の研究から、古代の活動の一端を復元することもできた。更には、第 18 王朝後期よりも前に年代付けられる壁の存在が明らかとなり、今後、この壁の性格を明らかにすることが課題として挙げられた。コンスウエムヘブ墓では、本格的な保存修復作業、岩盤補強作業を開始し、一定の成果を得た。特に壁画や彫像の補強作業を行い、崩落の危険性が減少したことは大きな成果である。

以上が第 11 次調査の成果の概要である。来期以降も発掘調査、保存修復作業を継続し、ウセルハト墓（第 47 号墓）、コンスウエムヘブ墓（KHT02）、コンス墓（KHT03）を中心として、研究を進めていきたい。

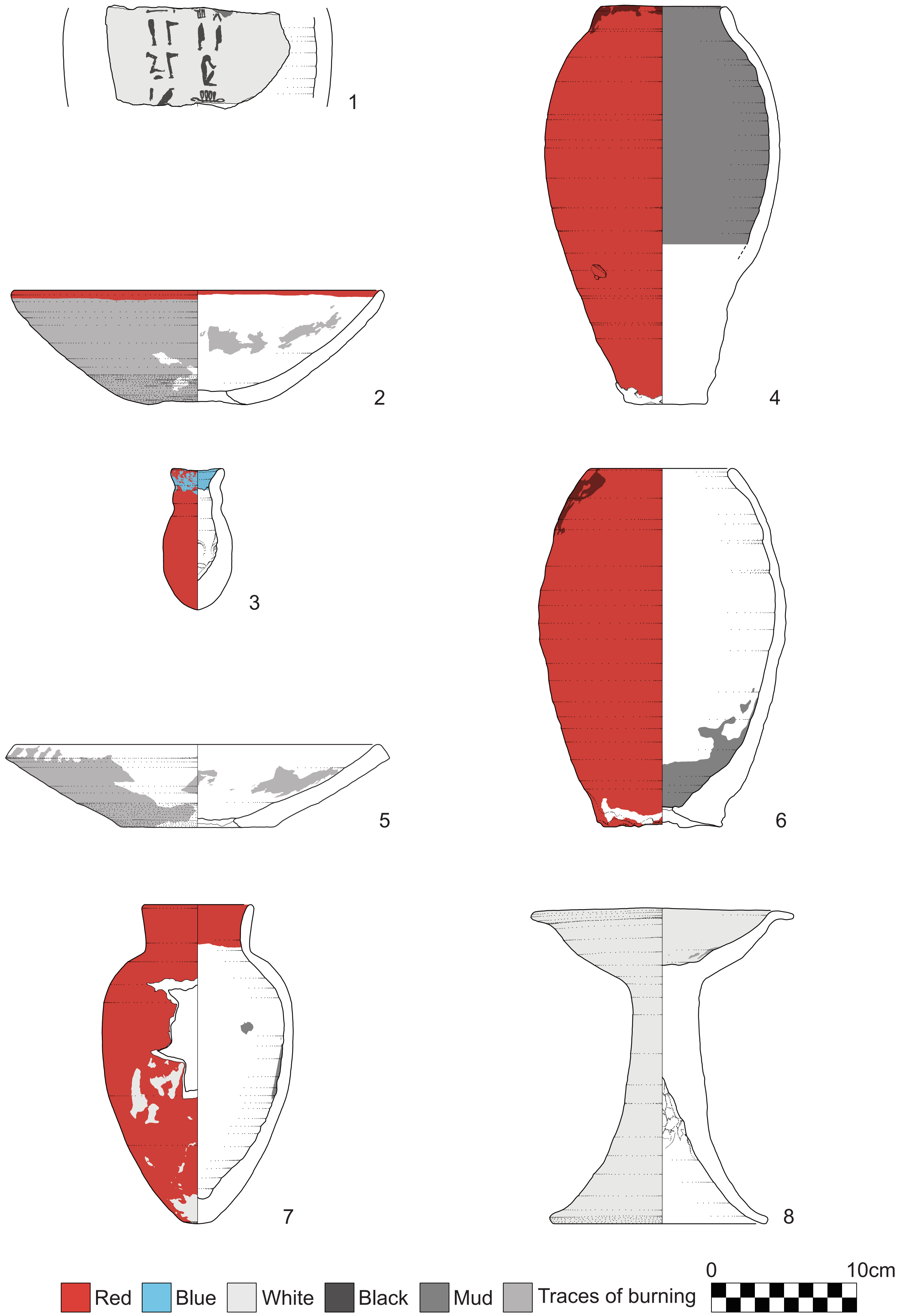


図 7　ウセルハト墓の前室上部から出土した土器
Fig.7 The pottery vessels from the area above the transverse hall of the tomb of Userhat

写真 9　カノポス壷
Pl.9 Pottery canopic jar

写真 10　白色の高坏形土器
Pl.10 White washed dish on tall stand

謝辞

エジプト現地調査では、エジプト・アラブ共和国考古大臣カリード・アル＝アナニー閣下、考古最高評議会事務総長ムスタファ・ワジーリー博士、古代エジプト部部長アイマン・アシュマウィ博士、上エジプト局長モハメド・アブデル・バディア氏、外国調査隊管轄事務局長モハメド・イスマイール博士、上エジプト総局長ムハンマド・アブデル・アジーズ博士、ルクソール西岸総局長ファティ・ヤシーン氏、ルクソール西岸クルナ査察局長バハ・ガビル氏、ルクソール西岸中部地区長エッズ・アル＝ディン・カマル・ヌビ氏、ルクソール西岸主任査察官アハメド・バグダディ氏、査察官アラー・フセイン・マハムード氏、保存修復部上エジプト局長アブデル・ナーセル氏、ルクソール西岸保存修復局長アハメド・アリ氏、保存修復部ルクソール西岸中部地区長ファティマ・カイリィ氏、修復師アスマ・サイード氏、マハムード・ハッサン・アル＝アザブ氏をはじめとする方々に多大なご協力を頂いた（肩書きは調査当時のもの）。

また、図版などの作成には早稲田大学エジプト学研究所のアブデルアール・アハメド・マハムード・ムハンマド、石崎野々花、菅沼奏美の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する。

なお、本調査は日本学術振興会科学研究費・基盤研究（A）「エジプト、ルクソール西岸の新王国時代岩窟墓の形成と発展に関する調査研究」（研究代表者：近藤二郎）の助成を受けて実施された。

註

1) マルカタ南遺跡のコム・アル＝サマク（魚の丘）における調査に関しては主に以下を参照（古代エジプト調査委員会編 1983）。

2) マルカタ王宮の調査は主に以下を参照（早稲田大学古代エジプト建築調査隊編 1993）。ルクソール西岸岩窟墓の一連の調査は主に以下を参照（早稲田大学エジプト学研究所編 2002, 2003, 2007）。王家の谷・アメンヘテプ 3 世王墓における調査は主に以下を参照（Kondo 1992, 1995; Yoshimura and Kondo 1995; Yoshimura and Kondo (eds.) 2004; Yoshimura et al. 2005; 吉村 1993; 吉村、近藤 1994, 2000; 河合他 2001; 吉村他 2005, 2013; アメンヘテプ III 世王墓報告書刊行委員会編 2008, 2011）。

3) 第 47 号墓の研究史、研究上の問題点、アメンヘテプ 3 世時代の大型岩窟墓の問題について詳しくは以下を参照（近藤 1994）。その他、アメンヘテプ 3 世時代の大型岩窟墓については D. アイクナー（Eigner）の論考を参照（Eigner 1983）。

4) これまでの報告としては、ラインドによるウセルハトの葬送コーンの報告（Rhind 1862: 137）、ハワード・カーターによる第 47 号墓の構造に関する記述やウセルハトの葬送コーン、王妃ティイのレリーフ写真などの報告（Carter

1903: 177-178, Pl.II)、A.E.P. ウェイゴール（Weigall）の記述（Weigall 1908: 125）などが挙げられる。また、ベルギーのブリュッセル王立美術史博物館には第 47 号墓由来の王妃ティイのレリーフが収蔵されている（van de Walle et al. 1980: 18-20, Figs.3, 4）。

5) コンスウエムヘブ墓における保存修復作業、岩盤補強作業については、別稿で報告する予定である。

6) 調査は 2017 年 12 月 23 日から 2018 年 1 月 15 日、2018 年 3 月 3 日から 3 月 13 日まで実施された。調査の参加者は以下の通りである。考古班：近藤二郎、菊地敬夫、河合　望、高橋寿光、米山由夏、アブデルアール・アハメド・マハムード・ムハンマド、石崎野々花、菅沼奏美、建築班：柏木裕之、保存修復班：前川佳文、ダニエラ・マリア・マーフィー、岩盤工学班：ホセ・イグナシオ・フォカデル・ウトリッラ、ルイス・マーティン・ディアス、渉外：吉村龍人、ムハンマド・アシュリー。

7) その他の類例は、大英博物館所蔵の木棺にあり、同じく第 21 王朝に年代付けられている（Taylor 2001: pl.51.3 (EA24797)）。

8) 類似したモチーフで、黄色の背景に多彩色で装飾された棺の蓋が、大英博物館に所蔵されており、第 21 王朝に年代付けられている（Taylor 2001: pl.51.2 (EA24794), 3 (EA24797)）。

9) テラコッタ製の類似したシャブティは、ルクソール地域において第 3 中間期によく見られるものである（Aston 1994: 33; Schreiber 2008: 58–59）。

10) このような形態のシャブティは、おそらく監督官のシャブティであると考えられる（Strudwick 1996: 119）。

11) 同じように土製で緑の装飾が施されたシャブティが第 21 王朝に年代付けられている（Schneider 1977: no.4.5.1.11）。

12) 土器の胎土に関しては 10 倍のルーペによる観察を行い、エジプトの胎土分類システムのウィーン・システムを参照し、記述を行った（Nordström and Bourriau 1993; Bourriau et al. 2000: 130–132）。胎土の色調に関しては、マンセルのカラーチャートを用いて記述を行った。土器の器形分類に関しては、最大径と高さの関係などの数値に基づいた器形分類を参考に、エジプトの土器研究で一般的に用いられている英語名称を日本語に訳し、名称を付した（Aston 1998: 41–51）。

13) 類例は王家の谷、17 号墓および 47 号墓から出土している（Aston 2014: pls.7.78, 26.244, 27.253）。

14) 類例は同じく王家の谷、17 号墓から出土している（Aston 2014: pl.11.110）。

15) 類例はマルカタ王宮から出土している（Hope 1989: fig.1.k）。

16) 同じく類例はマルカタ王宮から出土している（Hope 1989: fig.2.f）。

17) 類例はマルカタ王宮（Hope 1989: fig.3.f）とアマルナ王宮（Rose 2007: no.414）から出土している。

18) 類例はアマルナ王宮（Rose 2007: nos.37, 38）に見られる。

19) 特に赤色の土器の焼成後に開けられた孔については、*sḏ dšr.wt*「赤色の土器を割る」儀式との関連が考えられる。「赤色の土器を割る」儀式については、以下を参照（van Dijk 1993: 173–188; Ritner 1993; Budka 2014）。

参考文献

Aston, D.A.

1994　“The Shabti Box: A Typological Study”, *Oudheidkundige Mededelingen uit het Rijksmuseum van Oudheden te Leiden* 74, p.33.

1998　*Die Keramik des Grabungsplatzes Q I. Teil 1. Corpus of Fabrics, Wares and Shapes*, Mainz am Rhein.

2014　*Pottery Recovered Near the Tombs of Seti I KV 17 and Siptah KV 47 in the Valley of the Kings*, Basel.

Bourriau, J., Nicholson, P.T and Rose, P.

2000　“Pottery”, in Nicholson, P.T. and Shaw, I. (eds.), *Ancient Egyptian Materials and Technology*, Cambridge, pp.121–147.

Budka, J.

2014　“Egyptian Impact on Pot-breaking Ceremonies at el-Kurru? A Re-examination”, in Anderson, J.R. and Welsby, D.W. (eds.), *The Fourth Cataract and beyond: Proceedings of the 12th International Conference for Nubian Studies*, Leuven, Paris and Walpole, pp.641–654.

Carter, H.

1903　“Report of work done in upper Egypt (1902-1903)”, *Annales du Service des Antiquités de l’Égypte* 4, pp.171–180.

Davies, N. de G. and Macadam, M.F.L.

1957　*A Corpus of Inscribed Egyptian Funerary Cones*, Oxford.

van Dijk, J.

1993　*The New Kingdom Necropolis of Memphis: Historical and Iconographical Studies*, Groningen.

Eigner, D.

1983 "Das Thebanische Grab des Amenhotep, Wesir von Unterägypten: Die Arkitektur", *Mitteilungen der Deutschen Archäologischen Instituts Abteilung Kairo* 39, pp.39-50.

Engelbach, R.

1924 *A Supplement to the Topographical Catalogue of the Private Tombs of Thebes*, Cairo.

Franzmeier, H.

2017 *Die Gräberfelder von Sedment im Neuen Reich (2 vols.): Materielle und kulturelle Variation im Bestattungswesen des ägyptischen Neuen Reiches*, Leiden.

Hope, C.

1989 *Pottery of the Egyptian New Kingdom: Three Studies*, Burwood.

Kondo, J.

1992 "A Preliminary Report on the Re-clearance of the Tomb of Amenophis III", in Reeves, C.N. (ed.), *After Tutankhamun: Research and Excavation in the Royal Necropolis at Thebes*, London and New York, pp.41–54.

1995 "The Re-clearance of Tombs WV 22 and WV A in the Western Valley of the Kings", in Wilkinson, R.H. (ed.), *Valley of the Sun Kings: New Explorations in the Tombs of Pharaohs*, Tucson, pp.25–33.

Kondo, J. and Kawai, N.

2017 "Discovered, lost, rediscovered: Userhat and Khonsuemheb", *Egyptian Archaeology* 50, pp.22–26.

Müller-Winkler, C.

1987 *Die Ägyptischen Objekt-Amulette*, Göttingen.

Nelson, M.

2006 "La tombe d'une nourrice royale du début de la XVIIIème dynastie découverte au Ramesseum: Concession funéraire ST1.Sa05/pu01", *Memnonia* XVII, pp. 115–129.

Nordström, H-Å and Bourriau, J.

1993 "Ceramic Technology: Clays and Fabrics", in Arnold, D. and Bourriau,J. (eds.), *An Introduction to Ancient Egyptian Pottery*, Mainz am Rhein, pp.143–190.

Rhind, A.H.

1862 *Thebes: Its Tombs and Their Tenants, Ancient and Present: A Record of Excavations in the Necropolis*, London.

Ritner, R.K.

1993 *The Mechanics of Ancient Egyptian Magical Practice*, Chicago.

Rose, P.

2007 *The Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*, London.

Schneider, H.D.

1977 *Shabtis: An Introduction To The History of Ancient Egyptian Funerary Statuettes with A Catalogue of the Collection of Shabtis in the National Museum of Antiquities of Leiden*, 3 vols., Leiden.

Schreiber, G.

2008 *The Mortuary Monument of Djehutymes II: Finds from the New Kingdom to the Twenty-sixth Dynasty*, Budapest.

Seyfried, F. (ed.),

2012 *In the Light of Amarna: 100 Years of the Nefertiti Discovery*, Berlin.

Strudwick, N. and Strudwick, H.

1996 *The Tombs of Amenhotep, Khnummose, and Amenmose at Thebes (Nos. 294, 253, and 254)*, Oxford.

Survey of Egypt

1924 *The Theban Necropolis, Scale 1:1,000*, Cairo.

Taylor, J.H.

2001 "Patterns of Colouring on Ancient Egyptian Coffins from the New Kingdom to the Twenty-Sixth Dynasty: an Overview", in Davies, W.V. (ed.), *Colour and Painting in Ancient Egypt*, London, pp.164–181.

van de Walle, B., Limme, L. and De Meulenaere, H.

1980 *La collection égyptienne, Les étapes marquantes de son développement*, Bruxelles.

Weigall, A.E.P.

1908 "Report on the Tombs of Shékh abd' el Gùrneh and el Assasîf", *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte* 9, pp.118–136.

Yoshimura, S., Capriotti, G., Kawai, N. and Nishisaka, A.

2005 “A Preliminary Report on the Conservation Project of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III (KV 22) in the Western Valley of the Kings: 2001-2004 Seasons”, *Memnonia* XV, pp.203–212.

Yoshimura, S. and Kondo, J.

1995 “Excavation at the tomb of Amenophis III”, *Egyptian Archaeology* 7, pp.17-18.

Yoshimura, S. and Kondo, J. (eds.)

2004 *Conservation of the Wall Paintings in the Royal Tomb of Amenophis III -First and Second Phases Report-*, Tokyo.

アメンヘテプ III 世王墓報告書刊行委員会編

2008『エジプト王家の谷・西谷学術調査報告書［I］ アメンヘテプ III 世王墓（KV22）を中心として』、中央公論美術出版 .

2011『エジプト王家の谷・西谷学術調査報告書［II］ KVA とアメンヘテプ III 世王墓（KV22）に隣接する地域』、中央公論美術出版 .

河合　望、吉村作治、近藤二郎、ジョルジョ・カプリオッティ

2001「アメンヘテプ III 世王墓保存修復プロジェクト予備調査概報」、『エジプト学研究』第 9 号、早稲田大学エジプト学会、pp.39–45.

古代エジプト調査委員会編

1983『マルカタ南〔I〕－魚の丘＜考古編・建築編＞－』、早稲田大学出版部 .

近藤二郎

1994「テーベ私人墓第 47 号」、『エジプト学研究』第 2 号、早稲田大学エジプト学会、pp.50–60.

近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合　望、西坂朗子、高橋寿光

2009「第 1 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 15 号、早稲田大学エジプト学会、pp.39–70.

2010「第 2 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 16 号、早稲田大学エジプト学会、pp.47–77.

2011「第 3 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 17 号、早稲田大学エジプト学会、pp.45–63.

2012「第 4 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 18 号、早稲田大学エジプト学会、pp.5–20.

近藤二郎、吉村作治、柏木裕之、河合　望、高橋寿光

2013「第 5 次次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 19 号、早稲田大学エジプト学会、pp.107–120.

2014「第 6 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 20 号、早稲田大学エジプト学会、pp.43–58.

近藤二郎、吉村作治、河合　望、菊地敬夫、柏木裕之、竹野内恵太、福田莉紗

2015「第 7 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 21 号、早稲田大学エジプト学会、pp.19–44.

近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合　望、高橋寿光、竹野内恵太、福田莉紗

2016「第 8 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 22 号、日本エジプト学会、pp.113–148.

近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合　望、高橋寿光、福田莉紗

2017「第 9 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 23 号、日本エジプト学会、pp.113–148.

近藤二郎、吉村作治、菊地敬夫、柏木裕之、河合　望、高橋寿光、福田莉紗、米山由夏

2018「第 10 次ルクソール西岸アル＝コーカ地区調査概報」、『エジプト学研究』第 24 号、日本エジプト学会、pp.11–35.

坂上和弘、馬場悠男

2017「アル＝コーカ地区 TT47 出土の人骨およびミイラの人類学的調査（第 9 次調査）」、『エジプト学研究』第 23 号、日本エジプト学会、pp.99–104.

阿部善也、扇谷依李、日高遥香、中井　泉
2017 「コンスウエムヘブ墓の壁画に使用された彩色顔料の非破壊化学分析」、『エジプト学研究』第 23 号、日本エジプト学会、pp.66–86.
前川佳文
2017 「コンスウエムヘブ墓壁画の保存修復に向けた事前調査報告」、『エジプト学研究』第 23 号、日本エジプト学会、pp.87–98.
吉村作治
1993 「早稲田大学古代エジプト調査隊調査報告（III)」、『オリエント』第 36 巻第 1 号、日本オリエント学会、pp.159–177.
吉村作治、近藤二郎
1994 「アメンヘテプ 3 世王墓の調査について　エジプト・ルクソール西岸、王家の谷西谷調査報告」、『人間科学研究』第 7 巻第 1 号、早稲田大学人間科学部、pp.187–199.
2000 「王家の谷・西谷調査報告－ 1992 年 8 月～ 2000 年 1 月－」、『エジプト学研究』第 8 号、早稲田大学エジプト学会、pp.57–64.
吉村作治、近藤二郎、河合　望、西坂朗子、瀬戸邦弘、高橋寿光、中右恵理子
2005 「アメンヘテプ 3 世王墓保存修復作業概報：2001 年 3 月～ 2004 年 3 月」、『エジプト学研究』第 13 号、早稲田大学エジプト学会、pp.5–21.
吉村作治、西坂朗子、高橋寿光
2013 「第 3 期アメンヘテプ 3 世王墓壁画保存修復プロジェクト概報」、『エジプト学研究』第 19 号、早稲田大学エジプト学会、pp.43–58.
早稲田大学エジプト学研究所編
2002 『ルクソール西岸岩窟墓〔I〕－第 241 号墓と周辺遺構－』、早稲田大学エジプト学研究所 .
2003 『ルクソール西岸岩窟墓〔II〕－第 318 号墓と隣接する墓－』、株式会社アケト .
2007 『ルクソール西岸岩窟墓〔III〕－第 333 号墓、A.21 号墓、A.24 号墓、W-4（Nr.-127-）号墓－』、株式会社アケト .
早稲田大学古代エジプト建築調査隊編
1993 『マルカタ王宮の研究　マルカタ王宮址発掘調査 1985-1988』、中央公論美術出版 .

調査報告

2018 年　太陽の船プロジェクト　活動報告

黒河内　宏昌＊1・吉村　作治＊2

Report of the Activity in 2018, Project of the Solar Boat

Hiromasa KUROKOCHI*[1], Sakuji YOSHIMURA*[2]

Abstract

1. Summary

This is a report of activities of the Solar Boat (the Second Boat of King Khufu) project in 2018.

2. Arrangement of facilities

Supply of electricity from the Boat Museum stopped because of changing regulation of Ministry of Antiquity. So we purchased a new generator (50 kVA) and it is providing electricity to the pit and laboratories.

3. Extraction of the wooden pieces

163 wooden pieces were extracted from the 12th and 13th layer in the pit. Total number of extracted pieces was 934 including 56 large ones. We suppose the total number of the wooden pieces is about 1200 if it is same as that of the First Boat. Many of the wooden pieces in the 12th and 13th layer are badly destroyed because they have been pressed under the pieces in the upper layers. It is difficult to lift up such wooden pieces.

4. Conservation

Conservation work of 134 wooden pieces was done. Total number of conserved wooden pieces was 898 including 56 large wooden pieces.

5. Measuring and study on reassembling

146 wooden pieces were taken measurement and total number of measured pieces was 879 including 47 large wooden pieces.

6. Photographing and transportation of the wooden pieces to GEMCC (the Grand Egyptian Museum Conservation Center)

98 wooden pieces were photographed and transported into GEMCC. Total number of transported pieces was 728 including 36.

7. Public relation

The procedure of this project was reported in one TV program, three symposium and accademic conference and three theses.

＊1　東日本国際大学エジプト考古学研究所教授
＊2　東日本国際大学学長・教授／早稲田大学名誉教授

＊1 *Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashinippon International University*
＊2 *President, Professor, Higashinippon International University Professor Emeritus, Waseda University*

太陽の船（クフ王第二の船）発掘・保存・組み立て復原プロジェクトの 2018 年の活動を、以下の項目別に報告する。

1. 概要
2. 現場施設の整備
3. 部材の取り上げ
4. 保存修復
5. 測量・復原考察
6. GEMCC への移送
7. 広報および学術発表

1. 概要

2018 年の本プロジェクトは、「大エジプト博物館建設事業実施促進支援業務（第二の太陽の船復原に係る技術支援）」第 2 フェーズ（期間は 2016 年 7 月～ 2020 年 3 月までの 3 年 9 カ月）の 3 年目として、（独）国際協力機構（以下 JICA）の支援を得て行ってきた。この第 2 フェーズの目標は、ピット内からすべての部材を取り上げ、保存修復処理を終了し、船の組み立て復原像を提示することである。

エジプトでの活動費（物品購入や現地雇用者の人件費等）は、この JICA からの支援と NPO 法人太陽の船復原研究所の資金でまかなった。また研究費や日本人スタッフの渡航費などは、JSPS 科研費 26257309 助成「古代エジプト・クフ王第 2 の船の復原に関する研究」（研究代表者；黒河内宏昌）でまかなった。

2018 年はピット内の第 12 層、第 13 層の部材の取り上げ、保存修復、測量および GEMCC への搬出を行った。これらの層には船の下部構造、すなわち船体を構成する舷側板や甲板梁などの大型部材が多数含まれており、それらの隙間に天蓋や櫂、船首や船尾周りの部材などの小型部材が置かれていた。層数はあくまでも我々が暫定的に付与しているものだが、ピットに残っているのはあと 2 層となる見通しである。

以下、2018 年の活動に参加したメンバーを列記する（敬称略）。

A. 日本側メンバー

吉村　作治	〔代表〕
黒河内　宏昌	〔現場主任〕
高橋　寿光	〔取り上げ〕
リチャード・ジャスキ	〔保存修復〕
西坂　朗子	〔〃〕
吉村　佳南	〔〃〕
柏木　裕之	〔測量〕
山田　綾乃	〔〃〕
大石　岳史	〔三次元測量〕
影沢　政隆	〔〃〕
根本　卓	〔〃〕
吉村　龍人	〔現地事務所所長〕
ユーセフ・カーリッド	〔現地事務所技師〕
岩出　まゆみ	〔広報〕

B. エジプト側主要スタッフ

マムドゥーフ・ターハ 〔考古学スーパーバイザー〕

アイーサ・ジダン 〔保存修復スーパーバイザー〕

エザト・フセイン 〔チーフワーカー〕

活動は通年に渡って行い、現場主任（黒河内宏昌）は約8カ月（241日）間エジプトに滞在して現場を管理した。残り4カ月間は現場事務所長（吉村龍人）やエジプト人のスーパーバイザーが現場を管理した。

2. 現場施設の整備

本プロジェクトの現場で消費する電力は、これまで自前の発電機と、隣接する「船博物館」（クフ王第1の船を展示）からの電力供給でまかなってきた。しかしエジプト考古省の内規の変更により、博物館が他の現場に電力を供給することができなくなったため、2018年5月に小型の発電機（50kVA、【図版1】）を新たに購入して、すべての電力を自力でまかなうこととした。

3. 部材の取り上げ

第12層【図版2】および第13層【図版3】から163点の部材を取り上げた。この中には長さ4メートルを超える大型部材が27点（内訳は舷側板9点、櫂周り1点、甲板梁11点、柱土台4点、天蓋梁2点）含まれている。これまでに取り上げた部材点数の総計は934点で、うち大型部材は56点（内訳は舷側板18点、舷檣・甲板桁6点、櫂周り7点、甲板梁19点、柱土台4点、天蓋梁2点）となる。

全体の部材総数は、クフ王第1の船と同じであれば、約1200点になると推測される。第2の船の部材は櫂周りを除いて、点数も形状も第1の船のそれときわめて類似している。

舷側板の多くはピットの中ですでにいくつかの部分に割れたり、深いクラックが入っており、当初のままに取り上げることができた部材は数少なく、分割して取り上げる例が多かった。それでも最長のものは長さ13メートルにも及び、そうした部材の取り上げや保存修復には1週間以上に渡る慎重な作業を必要とした【図版4】。

4. 保存修復

2018年には134点の部材の保存修復を終えた。その中には30点の大型部材が含まれている（内訳は舷側板11点、甲板梁12点、櫂周り1点、柱土台4点、天蓋梁2点）。これまでに保存修復を終えた部材の総数は898点で、うち大型部材は56点（内訳は舷側板18点、舷檣・甲板桁6点、オール周り7点、甲板梁19点、柱土台4点、天蓋梁2点）となる。

ピットの底が近づくにつれ、上層の部材の重みで破損した部材が多くなってきたため、保存修復は劣化した木材を薬品で強化する「強化処理」のみならず、破損してばらばらになった木片をパズルを解くようにして接合し、できるだけ元通りの形に戻す「部材の復原」も主な作業となってきた【図版5～10】。

5. 測量と復原考察

5-1 マニュアル測量

2018年には137点のマニュアル測量を終えた。その中には31点の大型部材が含まれている（内訳は舷側板9点、甲板桁2点、甲板梁13点、櫂周り1点、柱土台4点、天蓋梁2点）。これまで測量を終えた部材の総数は879点で、うち大型部材は47点（内訳は舷側板9点、舷檣・甲板桁6点、櫂周り7点、甲板梁19点、

柱土台 4 点、天蓋梁 2 点）となる。

甲板パネルを構成する部材は測量ののち、それらを接合したパネルの状態を復原考察して図化した【図版 11、12】。そしてそれらの当初の配列を復原考察した【図版 13】。また確認された甲板梁の配列を、古代の大工が記した番付や長さ寸法をもとに、第 1 の船の配列を参考に復原考察した。

また復原考察を経たパネル図をもとに、復原考察の結果を立体として検証するために、縮尺 1/10 で模型を製作している。この模型製作は女子美術大学内山博子研究室が行っている。

5-2 三次元測量

三次元測量はレーザースキャナーを用いてピット内第 12 層～第 14 層、および取り上げた部材のうちとくに舷側板、舷檣・甲板桁を中心に、部材の三次元測量を行った。使用したレーザースキャナーは Zoller+Fröhlich 社製「Z+F Imager 5010」、および ARTEC 3D 社製ハンディスキャナー「ARTEC EVA」である。前者はクラウドファンディング「人生最後の挑戦！ピラミッドの謎解明の鍵を握る太陽の船復原へ！」(代表; 吉村作治、協力；READYFOR 株式会社）によっていただいた寄付により購入した機材が、製造元のドイツから通関を経て現場に到着し、それを用いて行った。データの採取に関してはエジプト人スタッフから人材を選択し、彼らが現地で常時行うえるように技術移転を継続している【図版 14、15】。

また 2015 年 2 月に行った第 1 の船の三次元測量によるデータをもとに、第 1 の船の船体に関して、現状の部材形状をいくつかの指標をもとに変形シミュレーションしながら、それらが本来隙間なく結合していた建造当初の船体の形状をコンピューター内で復原する研究を行った【図版 16】。

以上の三次元測量に関する研究は、東京大学生産技術研究所大石岳史研究室が行っている。

6. GEMCC への移送

2018 年には、保存修復を終えた部材の中から 98 点を GEMCC に移送した【図版 17】。その中には 36 点の大型部材が含まれている（内訳は舷側板 6 点、舷檣・甲板桁 6 点、櫂周り 3 点、甲板梁 17 点、柱土台 4 点）。これまで移送を終えた部材の総数は 728 点で、うち大型部材は 2018 年に移送した 36 点となる。2018 年から移送を開始した大型部材を収納するために、GEMCC 内に新たな収蔵棚を増設した【図版 18】。

7. 広報および学術発表

2018 年の主な広報活動、学術発表は以下の通りである。

7-1 行事・TV 番組

①「太陽の船発掘現場を見学するツアー」〔東日本国際大学・福島民報社企画、JTB 主催〕の日本人団体ツアー（約 40 名）が 2 月 23 日に現場を見学【図版 19】。その様子は 3 月 26 日付け福島民報新聞で特集記事で紹介された。

② TV 特別番組「たけしの新・世界七不思議　ピラミッド新事実に芦田愛菜＆橋本環奈も仰天ＳＰ」、BS テレ東、12 月 30 日。

7-2 シンポジウム

①第 7 回太陽の船シンポジウム『太陽の船を表現する』、2018 年 6 月 18 日、於;早稲田大学小野梓記念講堂。

②第 3 回東日本国際大学エジプト考古学研究所公開研究発表会、2018 年 7 月 5 日、於；東日本国際大学。

7-3 学会発表・刊行物

①吉村作治、『太陽の船復活～エジプト考古学者吉村作治の挑戦』（ＮＰＯ法人太陽の船復原研究所、2018 年 2 月 15 日発行）【図版 20】。

②黒河内宏昌、吉村作治、「2017 年太陽の船プロジェクト活動報告」、エジプト学研究第 24 号、pp.5 ～ 12、2018 年 3 月。

③柏木裕之・山田綾乃、「クフ王第 2 の船 甲板 －実測調査報告 その２－」、『昌平エジプト考古学紀要第 6 号』、東日本国際大学昌平エジプト考古学会編、pp.3 ～ 55、2018 年 8 月 15 日刊行。

④柏木裕之、「クフ王第 2 の船の木材搬入方法について」、オリエント学会第 60 回大会研究発表要旨集 p.29、2018 年 10 月 14 日。

⑤山田綾乃、「番付分析を用いたクフ王第 2 の船甲板梁の配置に関する検討」、オリエント学会第 60 回大会研究発表要旨集 p.30、2018 年 10 月 14 日。

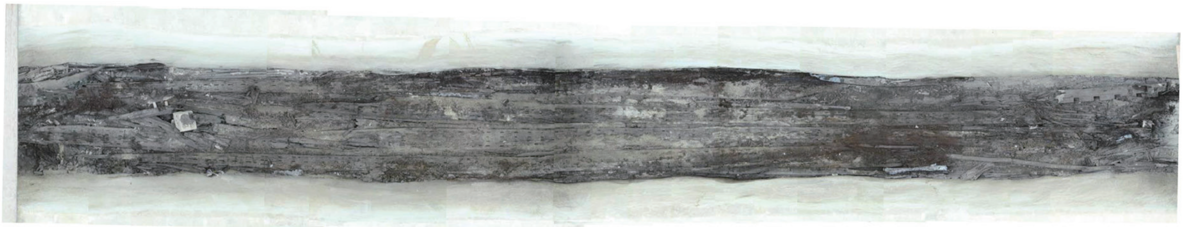
⑥柏木裕之・山田綾乃、「クフ王第 2 の船における舷墻と甲板梁・桁の構造と収まり」（ポスターセッション）、オリエント学会第 60 回大会研究発表要旨集 p.68、2018 年 10 月 14 日。

⑦ Hiromasa Kurokochi, “Environmental Aspect of The Second Khufu Boat Project”, The Impacts of Climatic Changes on the Monuments and Historic Sites, The first International Conference on Heritage Preservation, Institut du monde arabe and Ministry of Tourism Government of Egypt, Cairo, 2018.12.16.

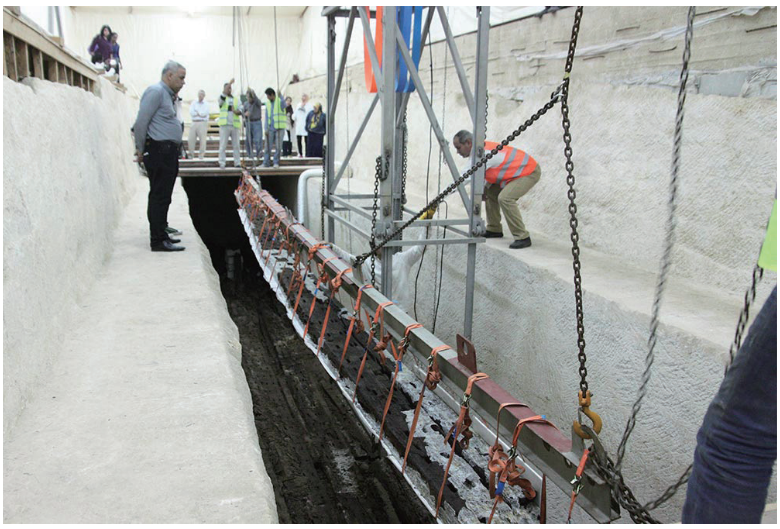
⑧ T. Nemoto, T. Kobayashi, T. Oishi, M. Kagesawa, H. Kurokochi, S. Yoshimura, E. Ziddan and M. Taha, “Virtual Restoration of Wooden Artifacts by Non-Rigid 3D Shape, Assembly: A Case of the First Solar Boat of King Khufu”, EUROGRAPHICS Workshop on Graphics and Cultural Heritage (2018) Short Paper (editors; R. Sablatnig and M. Wimmer), pp.241-245, 2018.

図版 1　新たに増設したジェネレーター
Fig.1 New Generator

図版 2　ピット内第 12 層（俯瞰合成写真）
Fig.2 The Twelfth Layer in the Pit (Photograph)



図版 3　ピット内第 13 層（俯瞰合成写真）
Fig.3 The Thirteehth Layer in the Pit (Photograph)



図版 4　大型部材の取り上げの様子
Fig.4 Scene of Extraction of a Large Wooden Piece

図版 5　船首柱の一部（先端部）
Fig.5 Top Part of the Stem Pillar

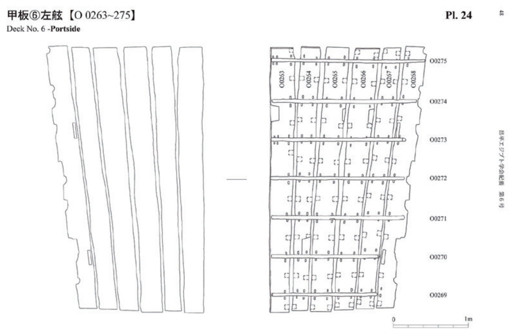
図版 6　船首柱の一部（中央部）
Fig.6 Middle Part of the Stem Pillar

図版 7　船首柱の一部（基部 1）
Fig.7 Bottom Part of the Stem Pillar(1)

図版 8　船首柱の一部（基部 2）
Fig.8 Bottom Part of the Stem Pillar(2)

図版 9　第 1 の船の完全な船首柱
Fig.9 Perfect shape of the Stem Pillar of the First Boat

図版 10　図版 5 ～ 8 等を接合して船船首柱を復原する
Fig.10 Scene of the Conservation Work of the Stem Pillar of the Second Boat joining broken Parts

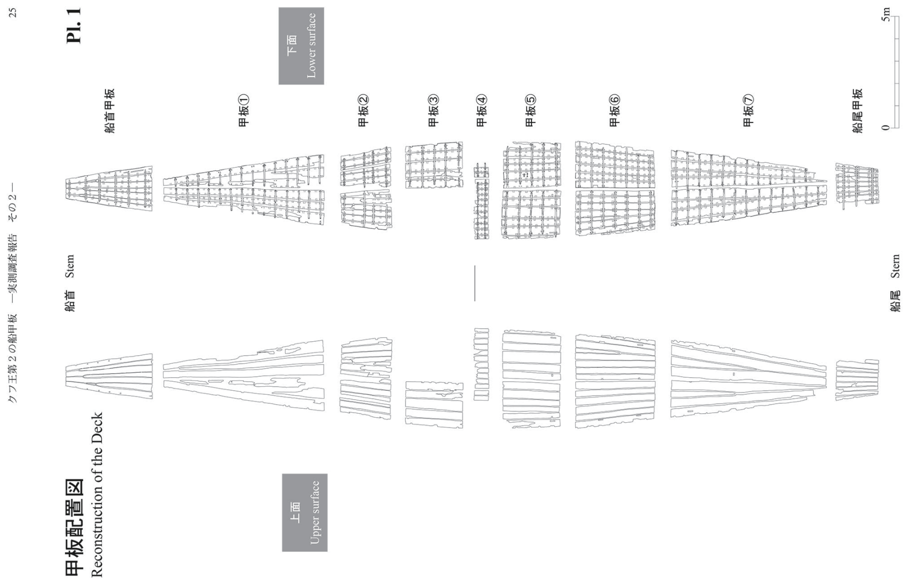


図版 11　甲板パネル復原図の一例（柏木・山田、2018 年 8 月、p.48 より）

Fig.11 Example of the Drawing of reassembled Deck Panel (Kashiwagi, H., Yamada, A., 2018.8, p.48)

図版 12　図版 11 のパネルのピット内での写真（柏木・山田、2018 年 8 月、p.49 より）

Fig.12 Photograph in the Pit of the Panel Fig.11 (Kashiwagi, H., Yamada, A., 2018.8, p.49)



図版 13　甲板パネル配列の復原図（柏木、山田、2018 年 8 月、p.25 より）

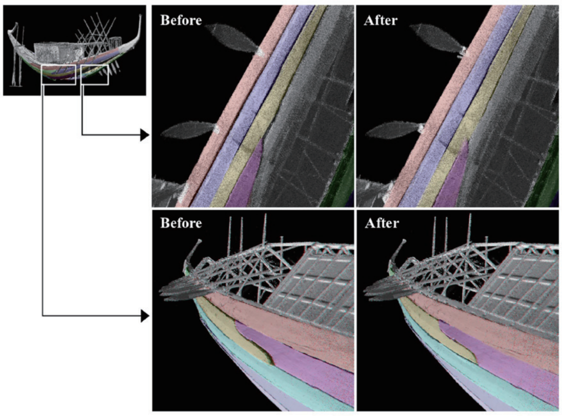
Fig.13 Drawing of Arrangement of Deck Panels (Kashiwagi, H., Yamada, A., 2018.8, p.48)

図版 14　エジプト人への三次元測量の技術移転

Fig.14 Scene of the Technology Transfer of 3D Scanning

図版 15　三次元測量イメージの一例

Fig.15 Example of the 3D Scanning Image



図版 16　三次元測量データのシミュレーションによる第 1 の船船体の仮想復原（中央列が現状、右列が隙間を埋めた復原、根本・大石・影沢他、2018、p.244 より）
Fig.16 Virtual Restoration of the Hull of the First Boat (middle;present, right;restoration by closing gaps, Nemoto. T., Ohishi, T., Kagesawa, M., et.al., 2018, p.244)

図版 17　大型部材の GEMCC 移送光景
Fig.17 Scene of Transportation of Big Wooden Pieces to Grand Egyptian Museum Conservation Center.

図版 18　GEMCC の新収蔵棚に大型部材を収納
Fig.18 Scene of Storing the Large Pieces into the New Shelves Corner in GEMCC

図版 19 「太陽の船発掘現場を見学するツアー」を案内する吉村代表（2 月 23 日）
Fig.19 Prof. Dr. Yoshimura introducing the Site to the Tour Visitors (2018.2.23.)

図版 20　吉村代表の著書（2018 年 2 月）
Fig.20 The Book written by Yoshimura, S., 2018.2.

エジプト学研究　第 25 号
2019 年 3 月 31 日発行

発行所 / 日本エジプト学会
　〒 169-8050 東京都新宿区戸塚町 1-104
　早稲田大学エジプト学研究所内
発行人 / 近藤二郎

The Journal of Egyptian Studies No.25
Published date: 31 March 2019

Published by The Japan Society of Egyptologist
1-104, Totsuka-chyo, Shinjyuku-ku, Tokyo, 169-8050, Japan